

# 武蔵国分寺跡発掘調査概報

32

史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）保存整備事業に伴う事前遺構確認調査  
平成15・16年度

2006年3月

国分寺市遺跡調査会  
国分寺市教育委員会





1 中塚部区画施設南辺地区 調査区遠景 (南から)



2 中央旧トレンチSX249築地跡跡・SD194・197溝跡 南北土層断面 (東から)



1 第578次調査 SB224 (塔跡2) 全景 (西から)



2 第570次調査 SB224 (塔跡2) 掘り込み地業断ち割り (南から)

## 序

武蔵国分寺跡（僧寺地区）は、武蔵国分尼寺跡と一体で（指定当時は国分寺跡関係の建築物群として指定）大正11年に国の指定を受けた史跡であり、東京都指定史跡東山道武蔵路などとともに、国分寺市の主要な遺跡として、また古代武蔵国の歴史を知る上で重要な遺跡です。

国分寺市教育委員会では、歴史遺産と自然環境に恵まれた史跡を「歴史のまち国分寺」のシンボルとして、周辺の都市化から保護・保存し、史跡公園として整備・活用するための環境整備事業を推進しています。

広域学術調査として行った寺域確認調査の成果をもとに、昭和62年から平成2年にかけて策定した保存管理計画、整備基本構想、整備基本計画に基づき、平成4年度より尼寺地区を対象に事前遺構確認調査と整備工事を行い、平成15年4月に国分寺市立歴史公園 武蔵国分尼寺跡として開園を迎えました。

引き続き、僧寺地区の保存整備事業を行うため、平成14年度に現況にあった僧寺地区新整備基本計画を策定しました。これに基づいて平成15年より保存整備事業の一環として、主要遺構の確認調査を国庫および東京都の補助事業として実施することとしました。

調査の実施は、国分寺市が史跡武蔵国分寺跡の広域学術調査や史跡保存整備に伴う調査、並びに市内所在遺跡の各種開発に伴う緊急調査等を行うために設置した国分寺市遺跡調査会があたりました。

平成15・16年度の調査では、現に礎石が残る七重塔跡の西方に新たに塔跡が発見され、伽藍中樞部の区画・溝の規模・構造・変遷が明らかになるなど大きな成果を上げることができました。

調査にあたりましては、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導、ご助言を賜り、また地元住民をはじめ関係各位のご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

調査は平成17年度以降も継続して実施しておりますので、今後とも宜しく願い申し上げます。

平成18年3月

国分寺市教育委員会

## 例 言

1. 本書は東京都国分寺市西元町に所在する国指定史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）の史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査の平成15・16年度の概要報告書である。発掘調査は文化庁と東京都の補助を受け、国分寺市教育委員会が調査主体となり、国分寺市遺跡調査会が調査を担当した。

なお、本書の体裁は、先行して整備事業を実施した尼寺地区の報告書（国分寺市教育委員会1994『武蔵国分寺跡Ⅰ』）に合わせた。

平成15年度（第570次）調査一覧

地点No	整備ゾーン (地点呼び名)	調査面積 (㎡)	調査地番 西元町三丁目	調査期間	
				開始	終了
1	南大門地区 (南大門南方第1)	15.8	2094-4.5	12/11	1/7
2	南大門地区 (南大門南方第2)	21.0	2093-5	12/16	2/19
3	塔地区 (七重塔南方)	34.2	2048-4	12/22	1/16
4	塔地区 (七重塔西方第1)	16.2	2008	1/14	2/5
5	塔地区 (七重塔西方第2)	32.2	2024-4	2/26	3/19
6	伽藍中軸地区 (中門東方)	58.0	2112-1.4	1/19	3/1

平成16年度（第578次）調査一覧

地点No	整備ゾーン (地点呼び名)	調査面積 (㎡)	調査地番 西元町三丁目	調査期間	
				開始	終了
1	伽藍中軸地区 (中軸部区画施設南辺地区)	445.6	2112-1.4, 2113-1.4.5	8/18	3/31
2	塔地区 (七重塔西方地区)	609.8	2004-29, 2008, 2023-4, 2024-1.4	7/1	3/31

2. 平成15年度調査は武蔵国分寺跡第570次調査として、平成15年12月11日から平成16年3月19日まで、買収地内において、面積177.4㎡の範囲について実施した。平成16年度調査は武蔵国分寺跡第578次調査として、平成16年7月1日から平成17年3月31日まで、買収地内において、面積1055.4㎡の範囲について実施した。なお、平成16年度調査の2地区は次年度も継続して調査する予定である。

出土遺物・写真・図面等へは遺跡略称のMKを冠し、「MK II-570-以下台帳番号、登録番号」のように表記しており、全て国分寺市教育委員会で保管している。なお、出土遺物は瓦類を主として平成15年度はコンテナ7箱、平成16年度はコンテナ250箱である。

3. 図面中の方位は特記以外は、僧寺伽藍中軸線を基準とした新極地座標北を表示している（詳しくはⅢ-1参照）。
4. 遺構断面図の水系高は特記以外は全て海拔標高64.00mに統一した。
5. 遺構断面図における地山のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

 II層
  IIIb層
  IIIc層（ローム濘移層）
  IV・V層（ローム層）

6. 遺構記号は下記の通りとし、Pを除いて第1次調査より連続番号を与えている。

SA 塀跡・柱列跡    SB 礎石建物跡・掘立柱建物跡    SD 溝跡    SF 道路跡  
 SK 土坑    SI 住居跡・工房跡    SX 特殊遺構    P 小穴・小柱穴

7. 出土遺物は、遺構出土など主たる遺物の多くが16年度以降に調査を継続する地区からの出土であることもあり、次年度以降の概要報告書においてまとめて報告する。
8. 発掘調査から概報作成にいたるまで、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導、ご助言を賜り、また地元住民をはじめ関係各位のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。  
荒井健治・有吉重蔵・飯島武次・池上悟・江口桂・北原實徳・酒井清治・須田勉・塚原二郎・西野善勝・服部敬史・深澤靖幸・福田健司・和田健行
9. 平成15・16年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体 東京都国分寺市教育委員会

調査担当 国分寺市遺跡調査会

平成15年度

役員および監事	会 長	坂崎秀一	国分寺市文化財保護審議会委員長
	副会長	藤間恭助	元国分寺市文化財保護審議会委員
	理 事	星野信夫	国分寺市長
		大平憲吾	国分寺市教育委員会委員長
		野村武部	国分寺市教育委員会教育長
		星野亮雅	元国分寺市社会教育委員
		本多寅太郎	国分寺市文化財保護審議会副委員長
		古関 豊	国分寺市文化財保護審議会委員
		関口雄基臣	〃
		北原 進	〃
		石田和彦	東京都教育庁生涯学習スポーツ部副参事
		小林文治	国分寺市教育委員会教育部長
	監 事	榎戸 潔	元国分寺市社会教育委員
		岡崎完樹	東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課理蔵文化財係長

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

	委員長	坂崎秀一	(考 古) 立正大学文学部教授
	委 員	藤井恵介	(建築史) 東京大学大学院工学系研究科助教授
	〃	佐藤 信	(古代史) 東京大学大学院人文社会系研究科教授
事務局	事務局長	加藤政幸	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
	事務局員	豊泉文夫	〃 文化財保護係長
		小澤憲保	〃 文化財保護担当係長
		松崎亜希子	〃 史跡係員
		船井 亮	国分寺市遺跡調査会
調査団	調査団長	坂崎秀一	(前出)
	主任調査員	福田何夫	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
	調査員	上村昌男	〃 史跡係員
		上敷徹久	〃 史跡係員
		中道 誠	〃 嘱託係員
		板倉勤之	国分寺市遺跡調査会
		合田方正	委託調査員
		熊崎 保	〃
調査補助		小池和彦・浅間陽・工藤朱里・近藤貴徳・堀岡寛男	
		佐藤 令	

平成16年度

役員および監事	会 長	坂詰秀一	国分寺市文化財保護審議会委員長
	副会長	藤間恭助	元国分寺市文化財保護審議会委員
	理 事	星野信夫	国分寺市長
		大平恵吾	国分寺市教育委員会委員長
		野村武郎	国分寺市教育委員会教育長
		星野亮雅	元国分寺市社会教育委員
		古関 豊	国分寺市文化財保護審議会委員
		関口雄基臣	〃
	北原 進	〃	
	坂本克治	〃	
	石田和彦	東京都教育庁生涯学習スポーツ部副参事	
	小林文治	国分寺市教育委員会教育部長	
	監 事	櫻戸 深	元国分寺市社会教育委員
岡崎完樹		東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課埋蔵文化財係長	

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

事務局	委員長	坂詰秀一	(考 古) 立正大学文学部教授	
	委 員	藤井忠介	(建築史) 東京大学大学院工学系研究科助教授	
	〃	佐藤 信	(古代史) 東京大学大学院人文社会系研究科教授	
	事務局長	本多孝一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長	
	事務局員	豊泉文夫	〃	文化財保護係長
		松崎亜希子	〃	史跡係員
		中倉まり子	〃	囃子係員
		福井 亮	国分寺市遺跡調査会	
		調査団長	坂詰秀一	(前出)
	調査団	主任調査員	福田信夫	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
調査員		上村昌男	〃	史跡係員
		上敷恒久	〃	史跡係員
		中道 誠	〃	囃子係員
		板倉 敬之	国分寺市遺跡調査会	
調査補助		合田方正	委託調査員	
		国武貞克	〃	
		井口正利・小池和彦・鈴木靖彦・藤崎努・大高広和・折原覚・嶋田圭吾・中島里佳・長友信・林敏太郎・藤野一之・山本祥隆・屋良健一郎・青山達夫・浦野勇・佐々木義身・秦泉寺感・田中輝紀・中谷勝次・百瀬兵一・小林幸江・若林雅子		
		国分寺市文化財愛護ボランティア		
		川上領一・前川朝・田中康敬・東見・田代稔・櫻井勲子・齋藤和子・香宗我部辰子		

10. 本書の編集・執筆は坂詰秀一団長の監修のもとに、福田信夫・中道誠が担当し、上村昌男・上敷恒久がこれに助けた。



# 目 次

序

例言

I	調査に至る経過と調査計画	1
II	僧寺跡の環境と既往の調査	5
1	位置・立地と周辺の遺跡	5
2	調査のあゆみと現状	7
3	層序	10
III	調査の経過	11
1	調査方法	11
2	調査日誌抄	13
IV	調査の概要	15
1	南大門地区	15
2	塔地区	15
3	伽藍中核地区	22
V	地下レーダーによる遺構探査の成果	30
VI	まとめ	33
	報告書抄録	41

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	3
第2図	調査地区の位置	4
第3図	基本土層図	10
第4図	調査基準線の設定	11
第5図	第570次調査No.1～4地点 遺構配置図	16
第6図	第570次調査No.5地点 七重塔西方第2 遺構配置図	18
第7図	第570次調査No.5地点 SB224(塔跡2)掘り込み地業断面図	19
第8図	第578次調査No.2地点 七重塔西方地区 遺構配置図	20
第9図	SX269一本柱跡平面・断面図	22
第10図	第570次調査No.6地点 中門東方 遺構配置図	25
第11図	第570次調査No.6地点 昭和33年度旧トレンチ 南北断面図	26
第12図	第578次調査No.1地点 中核部区画施設南辺地区 遺構配置図	27
第13図	第578次調査No.1地点 昭和33年度中央旧トレンチ SD194溝跡南北断面図	28
第14図	第578次調査No.1地点 昭和33年度中央旧トレンチ SD197溝跡南北断面図	29
第15図	第578次調査No.1地点 昭和33年度中央旧トレンチ SX249築地塀跡南北断面図	29
第16図	平成15年度地下レーダーによる遺構探査	31
第17図	平成16年度地下レーダーによる遺構探査	32

## 図版目次

- 巻頭図版 1 第578次調査 (No.1地点)
- 1 中樞部区画施設南辺地区 調査区遠景 (南から)
  - 2 中央旧トレンチSX249築地崩跡・SD194・197溝跡 南北土層断面 (東から)
- 巻頭図版 2 第570次調査 (No.5地点)・第578次調査 (No.2地点)
- 1 第578次調査 SB224 (塔跡2) 全景 (西から)
  - 2 第570次調査 SB224 (塔跡2) 掘り込み地菜断ち割り (南から)
- 図版 1 第570次調査
- 1 No.1地点 南大門南方第1 調査区全景 (南から)
  - 2 No.2地点 南大門南方第2 調査区全景 (東から)
  - 3 No.3地点 七重塔南方 調査区全景 (北から)
  - 4 No.4地点 七重塔西方第1 調査区全景 (北から)
  - 5 No.5地点 七重塔西方第2 調査区全景 (西から)
  - 6 No.6地点 中門東方 調査区全景 (北から)
- 図版 2 第578次調査 (No.1地点)
- 1 中樞部区画施設南辺地区 調査区全景 遺構確認状況 (北から)
  - 2 SA33掘立柱崩跡No.2・3柱穴 検出状況 (南から)
  - 3 SA33掘立柱崩跡No.10～13柱穴 検出状況 (西から)
  - 4 東側旧トレンチSA33掘立柱崩跡No.12柱穴・SX249築地崩跡 南北土層断面 (東から)
  - 5 中央旧トレンチSX249築地崩跡・SD396溝跡 南北土層断面 (東から)
  - 6 中央旧トレンチSD194溝跡 南北土層断面 (東から)
  - 7 中央旧トレンチSD197溝跡 南北土層断面 (東から)
  - 8 AトレンチSD194溝跡 遺物出土状況 (東から)
- 図版 3 第570次調査 (No.5地点)・第578次調査 (No.2地点)
- 1 第578次調査 七重塔西方地区 調査区遠景 (南から) 右:塔跡1 左:塔跡2
  - 2 第570次調査 SB224 (塔跡2) 掘り込み地菜断ち割り部 版築土上層 (南から)
  - 3 第570次調査 SB224 (塔跡2) 掘り込み地菜断ち割り部 版築土中層 (南から)
  - 4 第570次調査 SB224 (塔跡2) 掘り込み地菜断ち割り部 版築土下層 (南から)
- 図版 4 第578次調査 (No.2地点)
- 1 SB224 (塔跡2) 調査区北側検出状況 (南東から)
  - 2 SB224 (塔跡2) aトレンチ 掘り込み地菜断ち割り部 (北西から)
  - 3 SB224 (塔跡2) bトレンチ 掘り込み地菜断ち割り部 (北東から)
  - 4 SB224 (塔跡2) cトレンチ 掘り込み地菜断ち割り部 (南から)
  - 5 SB224 (塔跡2) dトレンチ 掘り込み地菜断ち割り部 (南東から)
  - 6 SB224 (塔跡2) eトレンチ 掘り込み地菜断ち割り部 (南から)
  - 7 SB224 (塔跡2) fトレンチ 掘り込み地菜断ち割り部 (南から)
  - 8 SX269一本柱跡 東西土層断面 (北から)

## I 調査に至る経過と調査計画

天平13(741)年の詔により鎮護国家の招来を目的に諸国60余国に建立された国分寺は、僧寺(金光明四天王護国寺)と尼寺(法華滅罪寺)が併置され、国府とともに地方統治のための重要な機関であった。

武蔵国分寺跡は江戸時代末期より文字瓦等の出土で注目され、明治36年の重田定一及び柴田常恵の実地踏査成果をもとに、大正7年の沼田頼輔、さらには大正9年の東京府嘱託高橋源一郎等による追従調査によって遺構の良好な保存が明らかになり、大正11年10月12日に「史蹟名勝天然記念物保存法」による国の史跡指定を受けるとともに翌年の12月13日に当時の国分寺村が管理者に指定された。

史跡の指定範囲は、実地踏査成果をもとに地上観察によって確認された礎石および古瓦の集中する地域を取り込む形で選定されており、指定面積は約94,181.7㎡である。また、指定直後の現状調査にもとづいて礎石の残存する僧寺の金堂・講堂跡と塔跡の一部約5,019㎡が指定の翌年に国有化されている。

武蔵国分寺跡の発掘調査は昭和31年に始まり、昭和33・39～41・44年と断続的に行われてきたが、尼寺跡の住宅化を契機に昭和39～41年まで行われた発掘調査では僧・尼両伽藍地の計画配置が想定されるなど多大な成果を上げている。

この間、昭和40年から史跡公園化を目標に指定地の公有化事業が始まるとともに翌年に市議会において「史跡公園促進特別委員会」が設置され、文化庁の指導のもとに昭和46年から3ヶ年計画で環境整備第1期工事として僧寺跡中核部の9,963㎡を対象に工事が実施された。ところが、市立第四中学校建設に端を発する武蔵国分寺跡の広域保存をめぐる混乱のさなか史跡整備の方法が問題となり、保存運動の争点の一つになったことから、整備工事は最終の昭和48年予定の金堂基礎復元工事を中断し、翌年、整地及び案内板設置等の工事を行い区切りをつけた。

武蔵国分寺跡の広域保存をめぐる混乱は、昭和49年に国分寺市の武蔵国分寺跡保存基本方針表明を受けて終息したが、以後、この方針を基に文化財課の新設や学芸員の増員、あるいは武蔵国分寺遺跡調査会による広域調査の開始、さらには整備計画策定委員会の条例設置(昭和54年)による史跡整備・博物館建設計画の策定着手などの努力が払われてきた。

その中で、史跡整備は昭和49年に開始された第1期調査(寺院地・伽藍地確認を目的)が昭和60年度に終了したことで武蔵国分寺跡の整備・保存に向けての準備が整い、市長期総合計画に基づいて昭和62・63年に保存管理計画、平成元年に整備基本構想、平成2年に整備基本計画を各々策定した。この過程で、史跡指定面積は3回の追加指定などによって平成2年度末現在で約103,211㎡(僧寺は80,585㎡、尼寺は22,626㎡)であることが明らかになった。

整備基本計画では、歴史遺産と自然環境に恵まれた武蔵国分寺跡を「歴史のまち国分寺」のシンボルとして多角的に活用できるように、史跡公園と(仮)郷土博物館を一体的に整備すること、整備のイメージを「国分寺崖線の緑を借景とし、壮大な武蔵国分寺の伽藍をイメージした史跡公園」及び「広く市民に親しまれるふるさと公園」とすること、伽藍が最も整った段階を整備の設定年代とすること、等を整備方針の基本理念とし、さらに整備の各部計画では、史跡指定地全域を僧寺跡の4地区と尼寺跡の2地区の計6地区に区分し、各地区の立地条件、特色を生かした整備を行うこと、実施時期は、とりえず尼寺のほぼ全域と僧寺の中心地域を短期整備計画の対象地として平成4年からの予定で尼寺跡、僧寺跡の順に進めること、等が提示された。

整備基本計画に基づき、公有化の進んだ尼寺地区を対象に平成4年度から平成7年度まで史跡保存整備のための事前遺構確認調査に着手した。平成9年度から整備工事を開始、平成14年度に完了し、平成15年4月に「国分

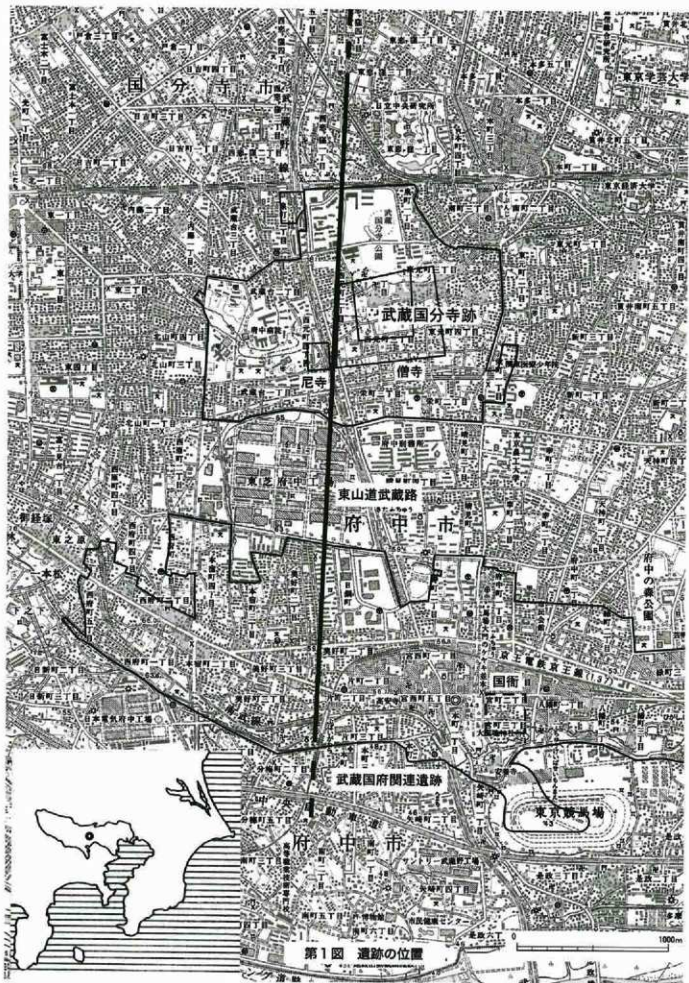
寺市立歴史公園「武蔵国分尼寺跡」として開園するはこびとなった。

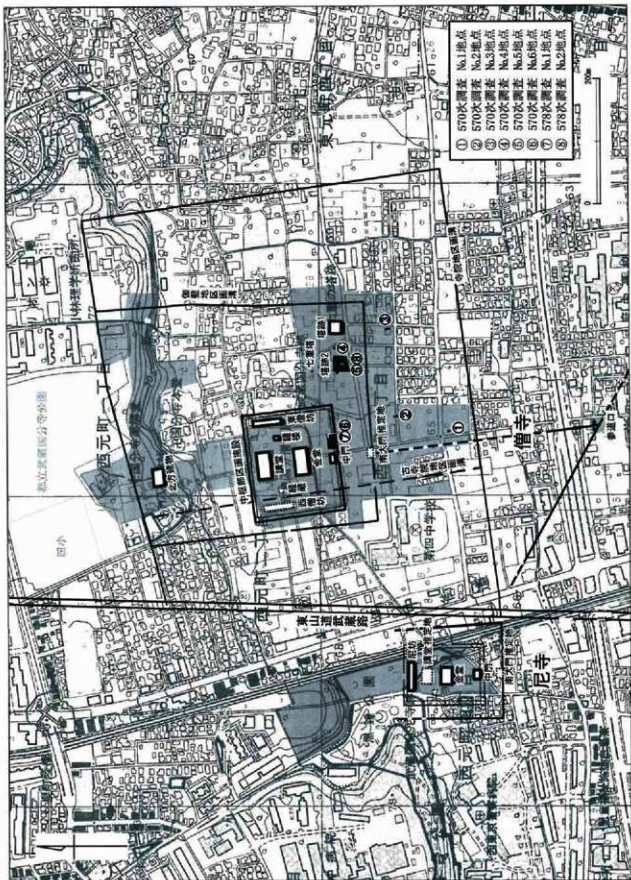
尼寺地区に引き続き、僧寺地区（指定面積は平成15年度末現在、約100,846㎡）の保存整備事業を行う予定であるが、平成2年に策定された整備基本計画より10年が経過し、この間において、史跡追加指定による整備対象地区の拡大、七重塔南方地区における宅地公有化の進展、西国分寺地区における東山道武蔵路の都史跡指定と保存整備事業の実施、尼寺地区保存整備事業の実施、等新たな状況に変化した。これらに伴って、整備基本計画を見直す必要が生じたため、僧寺地区の保存整備着手に先立って、保存管理計画、整備基本構想、整備基本計画（平成2年策定）に立脚し、平成15年に史跡武蔵国分寺跡〔僧寺地区〕新整備基本計画を策定した。

僧寺地区保存整備事業にあたり、整備工事に先行して整備基本設計及び実施設計のために事前遺構確認調査を行うこととし、確認調査を含めた事業計画は次の通りである。

事業計画表

計画等 年次	発掘調査		史跡整備等			地区	主な整備内容		
	事前確認調査	整備工事に伴う発掘調査	基本設計	実施設計 工事監理	整備工事				
1	前期	中 枢 地 区				第1期 (緊急整備)	整備の広報 (CG、模型) サイン整備		
2									
3			南 大 門 地 区	中 枢 地 区 前 期			第2期 (中枢地区前期)	金堂・講堂基礎整 備、中門基礎整備	
4									
5									
6									
7	塔 地 区	南 大 門 地 区			第3期 (南大門地区)	中軸回廊、南大門 表示			
8									
9									
10									
11	後期	中 枢 地 区 後 期			第4期 (中枢地区後期)	中軸伽藍内建造物 復元（中門建物、 塀復元など） ガイダンス施設			
12									
13									
14									
15									
16			塔 地 区	塔 地 区					第5期 (塔地区)
17									
18									
19	北 方 地 区	北 方 地 区			第6期 (北方地区)	崖線樹林保全整備 拠点整備			
20									





第2図 調査地区の位置

## II 僧寺跡の環境と既往の調査

### 1 位置・立地と周辺の遺跡

#### 位置・立地

武蔵国分寺跡は東京都国分寺市西元町一帯に所在し、東山道武蔵路を挟んで東に僧寺跡、西に尼寺跡がある。

国分寺市は、人口約10万、面積11.48kmあり、都心からJR中央線で30分前後という東京近郊にあって、急激な都市化の波を受けている多摩地域の小都市である。市の位置は、北緯35°42′、東経139°28′で、東京都のほぼ中央にあたり、東は小金井市、南は府中市、国立市、西は立川市、北は小平市に隣接する。

市域は関東平野の南西部に位置する武蔵野台地上にある。西の関東山地・多摩丘陵から、東の東京低地に至るまで西高東低の断面を示すなかで、市域の海拔標高は、55～92mを測る。武蔵野台地は青柳市付近を頂点として扇形に形成された国内最大級の洪積台地で、北東を荒川、北西を荒川支流の入間川、南を多摩川の各河川と沖積低地により範囲を画されており、東西50km、南北20kmを測る。台地は古多摩川が形成した河岸段丘で、台地の大半を占める高位の武蔵野段丘と、その縁辺にあってより低位の立川段丘とに分かれる。海成層（上総層群）を基盤として、武蔵野段丘面では、武蔵野礫層、武蔵野ローム、立川ローム、表土（黒色土）の順、立川段丘面では、立川礫層、立川ローム、表土（黒色土）の順に堆積している。

武蔵野段丘の南縁は立川段丘との比高差最大20mの段丘崖であるところの国分寺崖線となっている。崖線は武蔵村山市残堀付近から始まり、武蔵国分寺跡付近で高さ10mとなり、二子玉川へと続く古多摩川の側方浸食崖である。崖線は、立川、国立、国分寺市域を北西から南東へとほぼ直線的に通過するが、国分寺市西元町四丁目付近を起点に、小金井市前原付近を最奥部として、府中市浅間山をコンパスの軸として円弧を描くように、大きく湾曲して浸食されている。

武蔵野段丘上には古多摩川の名残川が形成した開析谷が幾筋も見られる。国分寺市恋ヶ窪付近から北西方向に奥深い谷が二筋あって、崖線の手前で会する。JR中央線国分寺駅と西国分寺駅間の北、日立製作所中央研究所構内の湧水群が野川の源である。野川は、崖線直下の湧水をさらに集め、およそ20km立川段丘上を東流して多摩川に注ぐ。

立川段丘上にも崖線に沿って野川の支谷がある（黒鐘谷）。国分寺市西元町四丁目（黒鐘公園）付近を源とし、現国分寺真山や真姿の池の湧水群を集めて、東元町三丁目の不動橋付近で野川の本流に加わる。

国分寺、府中、小金井周辺の立川段丘面には、いくつかの細長い凹地が認められている。このうちのひとつが西元町付近から始まり、府中市幸町、東京農工大農場、天神町、浅間山を経て、野川へと弓なりに続いている。東京農工大農場から東方では、地表面態で凹地の北に比べ南が1m以上低く、小窪が形成されている。凹地を挟んで礫層の上に乗るローム層に差が認められ、立川段丘面（TC）をtc1面とtc2面とに区分出来るという（松田隆夫・大倉利明1988「立川段丘と凹地地形について—府中市周辺の立川面の区分について—」『府中市郷土の森紀要第一号』所収）。tc1面の規模は東西6km、南北2kmで、ちょうど東西に長い木の葉状を呈する。

僧尼寺は立川段丘上、tc1面の崖線寄りに主要伽藍を置き、寺院地は武蔵野段丘の縁辺を取り込み、およそ東西900m、南北550mの範囲におさまる。

#### 周辺の遺跡

野川流域には旧石器・縄文時代遺跡が多く分布する。市内では多摩園坂、熊ノ舞、殿ヶ谷戸などの旧石器時代遺跡、多喜窪、八幡前、恋ヶ窪、羽根沢、恋ヶ窪東、恋ヶ窪南、花沢西、花沢東、本町（国分寺村石器時代）な

どの縄文時代遺跡が知られている。市外では、尼寺西方の府中市武蔵台遺跡が旧石器時代から縄文時代にかかる大規模な遺跡である。武蔵国分寺跡の下層には、多喜窪遺跡（早期、中期）をはじめとする旧石器・縄文時代遺跡が重なる。僧寺東方の立川段丘上に立地する八幡前遺跡（後期、加曾利B式期）を最後に縄文時代遺跡は消滅する。

以降、奈良時代に至るまでの間は、ほとんど空白期である。唯一、弥生時代中期前半期の土器3個体が、武蔵野段丘上の花沢西遺跡より出土して、野川流域における弥生文化流入期の様相の一端を示している。

立川段丘面の南縁は高さ10mほどの府中崖線によって沖積低地とに囲まれている。武蔵国分寺跡より約2kmの距離である。その縁辺には7世紀代に遡る自然集落が確認されている。以後、7世紀末～8世紀初頭に国衙が設定され、8世紀前半に成立したと考えられている。国衙推定地は大国魂神社境内及びその東方一帯の「京所」と呼ばれているところに位置し、国衙を取り巻く国府や衙並は国衙の北側一帯に広がっていたものと推測されている（府中市遺跡調査会1986『武蔵国府関連遺跡調査報告VII』）。

古代東山道武蔵路に比定される両側溝を有する幅12mの道路跡が武蔵国府の西方から僧尼寺間を貫いて北上し小平市境まで約4.2kmが確認されている。北約10kmに位置する狭山丘陵東端の所沢市東の上遺跡において延長部が発見され、道路の築造時期について側溝並びに硬化面上出土須恵器の年代観から7世紀第3-4半期と報告されている。

国分寺崖線の崖腹には、内藤新田横穴墓（内藤1丁目、1基）、多喜窪横穴墓群（西元町2・4丁目、2基）が確認されている。真姿の池上横穴墓（仮称、西元町1丁目、1基）なども道路工事で発見されており、さらに多数の横穴墓の存在が予測される。この内、内藤新田横穴墓は副葬品などから8世紀、多喜窪横穴墓群の内1基（西元町2丁目）は緑釉唾壺の出土から10世紀に改葬されたものと考えられている。

また、崖線縁辺部において骨甕器6点が発見されている。内5点が武蔵国分寺跡地北東地域（野川による開析谷沿い）、1点が西方多摩川遺跡出土のもので8・9世紀代の年代が与えられる。

一方、武蔵国分寺の瓦窯は、国内西方の丘陵地に営まれた。武蔵国分寺跡より遠い方から、末野窯跡群（埼玉県大里郡宮野町、武蔵国分寺跡からおおよそ60km）、南比企窯跡群（埼玉県比企郡鳩山町、同じく40km）、東金子窯跡群（埼玉県入間市、同じく20km）、南多摩窯跡群（東京都稲城市、八王子市、町田市、同じく5～10km、谷野窯跡・御殿山地区窯跡群・大丸窯跡・瓦谷戸窯跡）の4地域が知られている。

さて、中世、鎌倉街道上道はほぼ古代東山道武蔵路を踏襲したと見られるが、国分寺市域では西に150mほどずれ、尼寺伽藍を貫いて、北方台地に切り通しを残している。伝鎌倉街道に沿って中世の遺構、遺物が発見されている。武蔵国分寺跡、伝祥応寺跡、塚跡、恋ヶ窪度寺跡、恋ヶ窪遺跡などである。

武蔵国分寺跡の各地点からは地下式横穴、道路跡、溝跡、土坑などの遺構や陶磁器、板碑、石臼、古銭などが出土している。その年代は大概14世紀後半～15世紀中葉に集中しており、鎌倉時代のものは僅かである。この内、尼寺付近では、尼寺北辺部の瓦溜め群や西方の地下式横穴3基、溝跡1条、土坑1基、伽藍地内の西側を南北に縦断する推定鎌倉街道跡など比較的に集中している。

伝祥応寺跡は北方切り通しの西側台地上にあり、昭和44年に小規模な試掘調査が行われた。平安時代以前と思われる遺構は確認されず、遺瓦も少なく、板碑が数点出土した。確認された礎石はいずれも中世で、しかも3個しか見つからないため建物の復元は出来なかった。また、伝鎌倉街道に面して、旧建物の三方を囲んでいたという土塁状のものは、堅固に積み上げたものではなく、僅かに平安時代の瓦や土器片を含んでいた。本遺跡の性格・内容についてはなお不明であるが、出土した板碑などから鎌倉時代末から戦国時代にかけて一堂形式の寺院が営まれたものと考えられ、近年明らかになった本多良雄家文書によれば、江戸時代享保年間、国分寺村に大破して廃寺となっていた深川海福寺末寺の黒金山祥応寺を本多新田に引寺したものであることが知られ、本遺跡が祥応寺と呼ばれる禪宗の小寺院であったことが推察される。



切り通しの対岸に塚跡がある。『東京府史蹟勝地調査報告書』において、方形封土と古瓦の出土から、「国分寺」に関係を有する一種の土塔」とされて以来、土塔と呼ばれてきた。昭和44年の調査で、洪武通宝1枚と瀬戸灰釉瓶子が出土し、塚基部から縄文時代の埋蔵4基と平安時代の堅穴住居2軒が検出され、室町時代の造営で伝祥応寺との関係で理解される遺構と位置付けられるに至った。

恋ヶ窪廃寺跡は、尼寺の北方約900m、JR中央線西国分寺駅の南側に位置する。数次に及ぶ調査の結果、古代～中世の礎石建物跡、掘立柱建物跡、塙跡、土坑墓、火葬墓など三期の変遷でとらえられる遺構群が発見されている。この内、二期（13世紀末頃）においては、伝鎌倉街道に東面する伽藍を有する時宗系または禅宗系の寺院として再建されたものと想定されている。

伝鎌倉街道は恋ヶ窪廃寺跡の北約200mで谷をわたり、再び武蔵野段丘上を北上する。この恋ヶ窪谷は台地の奥で幅200～300mと広がっており、谷壁斜面下からは随所で見られ、野川の源流の一つになっている。この付近一帯には「恋ヶ窪」という地名が残されており、国分寺と並んで古くより集落が開かれ、中世、鎌倉街道沿いの宿場として栄えたという伝承があるが、その実態は明らかになっていない。最近の台地上の縄文中期の集落跡（恋ヶ窪遺跡）の調査において、地下式横穴1基が発見されるとともに、付近より13世紀末の常滑系甕などが出土しており、程かながらその実相究明に一資料を加えることとなった（以上、福田信夫1994「II尼寺跡の環境と既往の調査1位置・立地と周辺の遺跡」、『武蔵国分尼寺跡I』、有古重蔵1986「国分寺市域における中世遺跡」、『国分寺市史 上巻』による）。

## 2 調査のあゆみと現状

江戸時代末頃になると、内外の刺激によって科学的な探究心が高まり、江戸近郊の名所・旧跡を探访することが広く行われ、武蔵国分寺跡は好適地として文人、史人、好事家などの識者が注目するところとなった。遺跡にとどまらず、文字瓦や古瓦を再利用した硯などの珍品にあったことが、太田南畝『調布日記』や斎藤鶴鶴『武蔵野話』、植田孟簡『武蔵名勝圖會』、斎藤月岑『江戸名所圖會』などにより知ることができる。

明治に入り、重田定一は柴田常吉とともに武蔵国分寺跡の实地踏査を行い、初めて礎石の詳細な分布状況などが調べられ、帝國古蹟取調會の『古蹟』第2巻2号に「武蔵國分寺跡の廢址」として武蔵國分寺礎石配列図を掲載し、金堂・講堂・塔跡などの礎石の配列が明らかにされた。この調査が基礎資料の一つとなり、大正11年10月12日に武蔵國分寺跡は「史蹟名勝天然記念物保存法」による国の史跡指定を受けた。その後、東京府が委嘱した福村坦元・後藤守一により寺跡全般の詳細な調査（礎石・古瓦の分布、土壌の残存状況など）が行われ、「武蔵國分寺址の調査」、『東京府史蹟勝地調査報告書』第1冊として大正12年3月に刊行された。

武蔵國分寺跡における初めての発掘調査は、日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会（石田茂作委員長）より昭和31・33年に行われた。昭和31年調査（第1次調査）は僧寺金堂・講堂の調査を行い、金堂基壇の規模・構造、講堂の基壇西側の増築が確認されるなどの成果があった。昭和33年調査（第2次調査）は、僧寺中門跡東側の中樞部区画施設、南大門推定地などが調査され、中樞部区画施設の大溝や回廊の土壌と想定される遺構（平成16年度調査により築地城の基部部と判明）、南大門推定地では礎石据え付け跡と想定される掘方が4基検出された。

その後、東京周辺の市街地化が進むなか、昭和38年後半に尼寺跡の指定地において無許可で宅地造成が行われる事態がおこり、これを契機として国分寺市教育委員会による緊急調査が昭和39年3月より、調査団顧問に石田茂作、団長に久保常時、内藤政恒、瀬口宏、調査主任に松井新一、宇野信四郎、玉口時雄、坂巻秀一、岩崎卓也、大川清、長島健、前沢輝政、寺村光晴、坂井利明の諸氏が参加して以下の通り行われた。

第1次 昭和39年3月17日～3月28日（尼寺尼坊跡）

第2次 昭和39年4月29日～5月13日（尼寺金堂跡）

- 第3次 昭和39年7月6日～7月24日 (僧寺塔跡)  
 第4次 昭和40年7月19日～8月30日 (僧寺塔跡・金堂跡・推定鐘樓跡)  
 第5次 昭和40年12月5日～12月26日 (僧寺中門跡)  
 第6次 昭和41年8月1日～8月18日・12月21日～12月23日 (僧寺北方建物跡・中庭部区画施設跡等)  
 第7次 昭和44年3月28日～4月8日・4月27日～5月8日 (尼寺跡北方台上)  
 第8次 昭和46年9月2日～9月26日 (恋ヶ窪堂跡)

僧寺跡では、塔跡・金堂跡・中門跡・推定鐘樓跡・北方建物跡(旧北院址)などの規模・構造が明らかにされ、塔跡の調査では元位置で再建が確認され、『続日本後紀』の塔再建記事と符合することが判明した。

さらにその後、昭和47年10月、国分寺遺跡地内に市立第四中学校の敷地が選ばれ建設が予定されたのを機に、曲折を経て広域学術調査を実施する常設の調査会が組織され、昭和60年度までの12年間でほぼ僧尼寺の寺域を確認することができた(第1期)。会長は、星野亮勝市文化財保護審議会委員長(昭和54年3月までは塩谷信雄市長)、調査団長に滝口宏、副団長に永峯光一、大川清、坂詰秀一、調査員は都・市の職員が主体となった。

この内、僧寺の寺院地確認調査を以下に挙げる。

- 4次 昭和49年11月25日～12月19日 寺院地南辺 11.8㎡  
 5次 昭和49年12月4日～12月25日 塔跡東方 456㎡  
 6次 昭和49年12月7日～12月18日 寺院地南辺 1.75㎡  
 7次 昭和49年12月19日～12月25日 寺院地南辺 125.5㎡  
 8次 昭和49年12月19日～50年9月17日 市立第四中学校(第二次) 3871.5㎡  
 10次 昭和50年5月23日～5月30日 寺院地南方 20㎡  
 17次 昭和51年5月21日～12月17日 市立第四中学校(第三次) 1353㎡  
 28次 昭和52年1月7日～3月15日 伽藍地西辺 200㎡  
 29次 昭和52年2月15日～3月18日 伽藍地南西隅 200㎡  
 30次 昭和52年1月20日～2月14日 伽藍地南辺 78㎡  
 31次 昭和52年3月10日～5月6日 伽藍地南東隅 60㎡  
 32次 昭和52年4月8日～4月27日 伽藍地東辺38㎡  
 33次 昭和52年4月11日～5月4日 伽藍地北辺 99㎡  
 # 昭和52年3月22日～5月10日 伽藍地北辺 115.5㎡  
 38次 昭和52年4月4日～11月24日 市立第四中学校(第四次) 1234.2㎡  
 41次 昭和52年5月23日～6月9日 寺院地北方 88.375㎡  
 42次 昭和52年5月16日～5月24日 寺院地北辺 27㎡  
 # 昭和52年7月13日～9月26日 寺院地北辺 6.66㎡  
 43次 昭和53年2月13日～3月1日 伽藍地北東隅 80.36㎡  
 44次 昭和52年7月20日～10月21日 寺院地南辺 187.13㎡  
 112次 昭和55年11月10日～11月28日 寺院地南辺 22.288㎡  
 133次 昭和56年10月26日～10月30日 寺院地東辺 41.594㎡  
 135次 昭和57年1月13日～5月1日 寺院地西辺 290.7㎡  
 163次 昭和57年12月13日～58年3月9日 寺院地南辺 62㎡  
 164次 昭和58年1月7日～3月31日 寺院地南東隅 84㎡  
 165次 昭和58年1月10日～2月25日 寺院地南東隅 72㎡  
 175次 昭和58年4月4日～12月23日 寺院地南辺 144㎡

- 176次 昭和58年4月18日～7月28日 寺院地北東隅 65㎡  
 202次 昭和59年7月6日～60年1月16日 伽藍地南辺 147.75㎡  
 226次 昭和60年3月4日～10月3日 中樞部区画施設南辺（中門西） 282.315㎡  
 248次 昭和61年2月1日～3月31日 伽藍地東方 45.5㎡

昭和61年度からは、窓ヶ窪遺跡調査会と統合して新たに発足した国分寺市遺跡調査会により第二期調査として整備に先行する調査及び寺院地確認補足調査が行われ、現在に至っている。

僧寺関係の寺院地確認補足調査として次の調査が行われている。

- 250次 昭和61年3月10日～11月20日 講堂北西地域 247.7㎡  
 267次 昭和61年10月2日～62年1月31日 市立第四中学校（第五次） 971.8㎡  
 281次 昭和62年4月8日～5月13日 伽藍地北辺 36㎡  
 295次 昭和62年8月3日～12月7日 塔跡北方 390㎡  
 303次 昭和63年4月1日～11月30日 伽藍地西辺 152.9㎡  
 322次 平成元年7月11日～12月27日 中樞部区画施設北西隅 170.09㎡  
 360次 平成3年7月1日～12月27日 中樞部区画施設南辺（中門西） 560.1㎡  
 543次 平成13年9月12日～9月14日 伽藍地北辺 2.69㎡  
 551次 平成14年5月27日～8月30日 伽藍地北辺 117.25㎡

武蔵国分寺跡の僧寺地区は、国分寺市の南部に位置し、府中街道の東側、東八道路の北側にあって、国分寺崖線を背にした東西400m、南北600mの敷地が現在、史跡指定され、西に位置する尼寺地区とは鉄道の高架線や府中街道などで分断される形となっている。指定範囲は、伽藍地内面積のほぼ45%を占めるが、寺院地区画内は推定南大門跡から南辺区画溝に至る僧寺伽藍中軸線沿いの一部が指定されたのみとなっている。指定地内の土地利用としては、農地、公園が主体で、住宅、寺地などが含まれる。主要建物としては、金堂・講堂・中門・推定鐘楼・塔跡は公園として利用され、国分寺崖線上にある北方建物は現国分寺薬師堂と仁王門との間に、また推定経蔵跡や西僧坊跡は墓地内にあり現国分寺の寺地内に含まれている。

僧寺地区に先駆けて平成4年度から進められた尼寺跡の保存整備事業は、平成14年度に整備工事が終了し、平成15年度に「国分寺市立歴史公園 武蔵国分尼寺跡」として開園している。

### 3 層 序

今回報告する各調査地区の層序は第3図に示すとおりであるが、堆積土の様相はほぼ同様であり、共通した層序を示す。以下にその基本層序を記す。

I a 層 盛土。ローム、砂利、ガラなどの客土。層厚10～40cm。

I b 層 表土。耕作土。粘性弱い。暗褐色で、乾燥するとバサバサして崩れやすい土。下部は黒褐色土と混じる。層厚約30cm。

II 層 黒褐色土。粒子粗い。締まりやや弱い。粘性弱い。層厚約20cm。奈良・平安時代の遺物包含層。

III a 層 暗茶褐色土。粒子やや粗く、粘性やや弱い。II層とIII b層との境は漸移的。層厚10～20cm。

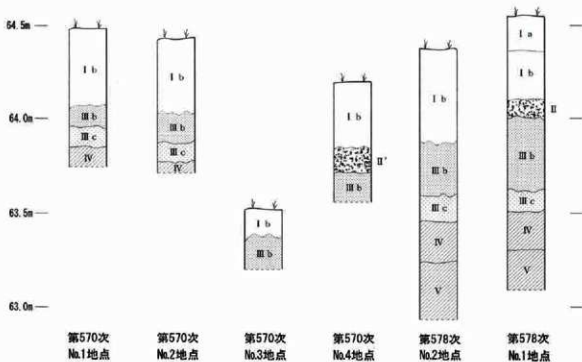
III b 層 暗茶褐色土。上層より明度高い。下部に行くに従って、黄色味が強くなる。本層の上面で歴史時代の遺構が検出しやすくなる。縄文時代の遺物を多く含む。層厚30～40cm。

III c 層 茶褐色土。ローム漸移層。上部に縄文時代の遺物を多く包含する。上面で縄文時代の遺構を確認しやすくなる。層厚10～20cm。

IV 層 暗黄褐色ローム。ソフトローム。層厚30～40cm。

V 層 黄褐色ローム。ハードローム。下層に行くに従い、黄色味が少なくなり、灰褐色味が強くなる。赤・黒色スコリアを多く含む。

第570次調査No.4地点では、III層混じりでやや乱れたII層に類似した堆積土をII'層とした。



第3図 基本土層図

### III 調査の経過

#### 1 調査方法

##### 調査基準線と発掘区の呼称

僧尼寺の広大な範囲を統一して調査するため、1974年以来、僧尼寺の伽藍中軸線を基準に、金堂心の北26.276mの中軸線上の点（コンクリート枕理設）を座標原点とする極地座標系によっている（1979『武蔵国分寺遺跡調査会年報1974 武蔵国分寺跡』）原点は国家三角点および市設基準点をもとに国家座標（国土調査法に定める平面直角座標系に変換したところ、IX系（原点は北緯36°、東経139°50'）のX=-34,446.024、Y=-32,449.078、H=64.989の数値を示す。極地座標北方向角は353°05'32"、原点における真北方向角は0°12'33"を示す。ゆえに、極地座標北（僧尼寺伽藍中軸線）の真北からの振れは西偏7°07'01"、磁北からの振れは、磁針方位が「西偏約6°30'（昭和45年）」なので、西偏0°37'01"である。

最小の発掘区は、3×3mとし、その南と西に接する基準線に与えた記号の組み合わせにより呼称する。東西基準線はアルファベット2文字であらわす。1文字目は原点をAとして始め60m毎に以下B・C・D…とふり、2文字目はその60m内を3m毎に20区に分けA～Tまでふる。従い、原点を通る東西基準線はAA、以下南北とも3mおきにAB・AC…AT・BA・BB・BC…BT・CA…と繰り返す。南北基準線は数字であらわす。原点を0とし、以下東西共に3mおきに1・2・3…とふる。このようにして発掘区を呼称すると、中軸線AAと0に接する区を除き、4つの象限に同一名称があることになるので、調査地区の記号に象限を入れMK（武蔵国分寺跡の略）II（調査地区の所在する象限）-570（調査回数）のように呼び、遺物への註記や写真・図面の整理を行う。本報告では中軸線からの数値をN・S・W・Eであらわし、併用する。

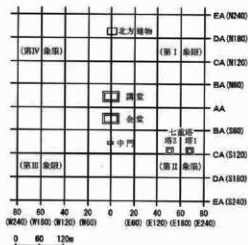
##### 調査区の設定

平成15年度調査（第570次調査）は、平成16年度以降における事前遺構確認調査計画立案のため、南大門地区・塔地区・伽藍中庭地区の3地区6地点に調査区を設定した。平成16年度（第578次調査）は、予備調査により七重塔（SB223塔跡=塔跡1）の西方約55mで新たに検出されたSB224塔跡（塔跡2）と中門東側の中庭部区画南辺とについて調査範囲を広げ本格的に調査するため、塔地区（七重塔西方地区）と伽藍中庭地区（中庭部区画施設南辺地区）の2地区に調査区を設定した。以下、地区ごとに述べる。

##### ①南大門地区

平成15年度（第570次調査）に、遺構確認面深度、土層堆積状態、遺物包含状況等の把握を主たる目的として、南大門南方において2地点（第570次Na1・2地点）を設定した。

第570次調査Na1地点（南大門南方第1）は、指定地の南端部に位置し、東京府調査時には付近に相当量の瓦がみられ、南大門を想定する意見もあった。昭和33年度の日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会の調査においても、当該地付近（道路の北側、金堂心より約232.2m南）でトレンチを入れたが、南北溝以外に建物跡関連の遺構



第4図 調査基準線の設定

は発見されていない。

第570次調査№2地点(南大門南方第2)は、当該地の東方で性格の不明な東西溝が既往の調査で確認されていることから、その西延長にあたる本地点を割り出し、東西3m、南北7mの調査区(中軸線の東48～50m、金堂心の南158.7～165.7m)を設定した。

### ②塔地区

平成15年度(第570次調査)に予備調査として、七重塔南方(№3地点)と七重塔西方第1・2(№4・5地点)の計3地点、平成16年度(第578次調査)に第570次№5地点で検出された塔跡と考えられる地業遺構(SB224)の基壇および建物の規模・形状・構造を確認する目的で、同地点において調査範囲を広げて七重塔西方地区(第578次調査№2地点)を設定した。平成16年度に塔跡本体部、平成17年度に周辺部の2ヶ年計画で行う調査の1年目である。

第570次調査№3地点(七重塔南方)は、七重塔(塔跡1)のほぼ南方70m地点において、従来宅地であったために、堆積データが少ないことと、近隣で検出されている創建期に比定され得る地業遺構と関連する遺構の存在の有無を確認すべく、東西3m、南北12mの調査区(中軸線の東191～194m、金堂心の南159.7～171.7m)を設定した。

第570次調査№4地点(七重塔西方第1)は、七重塔(塔跡1)の西方約30m地点において、塔周辺における堆積データを取得するために、東西6m、南北3mの調査区(中軸線の東168～174m、金堂心の南75.7～78.7m)を設定した。

第570次調査№5地点(七重塔西方第2)は、現に礎石が残る塔跡(塔跡1)の西方50m地点にある墓地付近の礎石群の性格をめぐって、かつて議論があり、何らかの建築遺構の存在が想定されていた場所である。今回、地業遺構などの把握を目的に地下レーダー探査を実施したところ、当該地点において約11m方形で、塔基壇のそれに似た反応範囲を捉えることができたので、確認のため、反応範囲の南辺に直交する東西2m、南北7mの調査区を設定した。地業遺構の版築土が確認された後には、各辺の状況把握のために幅1mのトレンチを西(8m)・北(2m)・東(4m)に設定したほか、中央部においても2m方形の調査区を追加して状況の把握に努めた。

第578次調査№2地点(七重塔西方地区)は、第570次№5地点で確認されたSB224地業遺構の基壇および建物の規模・構造などを確認するため全面調査を行った。

### ③伽藍中枢地区

平成15年度(第570次調査)は予備調査として、中枢部区画施設南辺溝・溝を確認する目的で中門東方(第570次№6地点)、平成16年度(第578次調査)は平成15年度調査区と同地点において調査範囲を広げて中枢部区画施設南辺地区(第578次№1地点)を設定した。なお、当該地区は日本考古学協会による昭和33年度調査区にあたり、中枢部区画施設南辺溝や回廊の土壌と想定される遺構などが検出された地点である。

第570次調査№6地点(中門東方)は、中門跡(SB216)の東方約35m地点で、SA10孤立柱礎の延長3スパン(柱間8尺等間)と南側の付属溝の一部をあらわし、南面東側の状態を探るべく東西8.5m、南北3～4.5mのL字型の調査区を設定した。調査に着手したところ、東端で、昭和33年度調査旧トレンチが確認できたので、溝の南側の立ち上がりまで、約11m南へ拡張した(東西3m)。

第578次調査№1地点(中枢部区画施設南辺地区)は、第1に中枢部区画施設柱礎の規模・構造、第2に予備調査で判明した土塁もしくは築地塼跡の規模・構造、第3に塼と土塁もしくは築地塼との関係、第4に2条の溝との関係、などを明らかにすることを目的とした。このために、第570次調査トレンチ位置から中門東方6m地点まで、柱間11間分の範囲に調査区を設定した。調査区はほぼ長方形で、僧寺伽藍中軸線から東へ約11～36m、金堂心から南へ約46～65mを測る。

## 2 調査日誌抄

### 平成15年度 (第570次調査)

- 3月31日 国分寺市遺跡調査委員会にて平成15年度  
 僧寺地区調査事業受託案承認。
- 11月13日 国分寺市と国分寺市遺跡調査委員会において調  
 査委託契約締結。
- 11月12日 南大門南方第1 (No.1地点) に安全柵設置、  
 発掘器材搬入。
- 12月11日 No.1地点発掘開始。
- 12月16日 南大門南方第2 (No.2地点) 発掘開始。
- 12月19日 七重塔南方 (No.3地点) に安全柵設置、発  
 掘器材搬入。
- 12月19日 No.2地点SD199溝跡・硬質面検出。  
 No.3地点発掘開始。
- 1月6日 No.3地点南側に拡張、表土除去。
- 1月7日 No.1地点埋め戻し終了。
- 1月9日 七重塔西方第1 (No.4地点) に安全柵設置、  
 発掘器材搬入。
- 1月14日 No.4地点発掘開始。
- 1月16日 No.3地点埋め戻し終了。  
 伽藍中庭地区中門東方 (No.6地点) に安全  
 柵設置、発掘器材搬入。
- 1月19日 No.6地点重機による表土掘削開始。
- 1月20日 No.6地点において旧トレンチを確認。
- 1月21日 No.6地点の旧トレンチ断面において中庭部  
 区画施設跡SA33掘立柱塼No.11柱穴 (後に柱  
 穴No.12と判明) とSD194溝跡の北側立ち上  
 がり部を確認。
- 1月22日 No.6地点SA33掘立柱塼No.10柱穴 (後にNo.11  
 柱穴と判明) 部分の東半分をトレンチ掘り  
 し、SX249地菜遺構 (後に築地塼と判明)  
 を掘削。
- 1月23日 整備計画策定委員会視察。
- 1月30日 No.6地点調査区を拡張し旧トレンチにおい  
 てSD194大溝・SD197小溝を確認。
- 2月5日 No.4地点埋め戻し終了。
- 2月7日 現場見学会。260名参加。
- 2月20日 No.2地点埋め戻し終了。
- 2月23日 地下レーダーによる遺構探査により、塔跡

- 1西方約55mの地点において塔跡基壇に類  
 似した反応を確認。
- 2月25日 地下レーダー探査の結果をうけて、七重塔  
 西方第2 (No.5地点) に調査区を設置する。
- 2月26日 No.5地点・1トレンチ発掘開始。地表下わ  
 ずか約0.2mでSB224地菜遺構検出。
- 3月1日 No.6地点埋め戻し終了。
- 3月3日 No.5地点・2トレンチ表土除去し、トレン  
 チ全面にSB224地菜遺構を検出。
- 3月4日 No.5地点・2トレンチ西側に拡張し、地菜  
 土の広がりを確認。
- 3月5日 No.5地点・1トレンチにおいてSB224の掘  
 り込み地菜の規模・構造を確認するためト  
 レンチ掘りを開始。
- 3月9日 No.5地点・3トレンチ表土除去。
- 3月11日 No.5地点・1トレンチにおいてSB224の断  
 ち割り部完掘。確認面から深さ約2.7mの掘  
 り込み地菜であることが判明。No.5地点・  
 4トレンチにおいて遺構確認。心礎部分に  
 掘り込みを検出。No.5地点・5トレンチ表  
 土除去。部分的にSB224の版築土検出。  
 No.5地点・1～4において礎石、基礎外装  
 は確認することはできなかった。
- 3月19日 No.5地点埋め戻し、現状復旧を終え、発掘  
 調査終了。

### 平成16年度 (第578次調査)

- 2月23日 国分寺市遺跡調査委員会にて平成16年度  
 僧寺地区調査事業受託案承認。
- 6月21日 国分寺市と国分寺市遺跡調査委員会において調  
 査委託契約締結。
- 7月1日 七重塔西方地区 (第2地点) 調査対象地に  
 安全柵設置、発掘器材搬入。  
 七重塔西方地区発掘開始。国分寺市ふるさ  
 と文化財愛護ボランティア第1期のみなさ  
 ん発掘調査に参加。第570次調査区 (No.5地  
 点・1・4トレンチ) を先行して掘削開始。
- 7月26日 SB224 (塔跡2) 北東部の版築の遺存範囲

	を確認。		深さ2m、柱頭径0.4~0.5mの柱穴と判明。
8月5日	中樞部区画施設南辺地区に安全柵設置、発掘器材搬入。	2月7日	SA33掘立柱塚の№2柱穴の検出を想定しAトレンチを設定するが想定より約1.2m西で柱穴を検出(№2柱穴)。その後、Aトレンチを北側に拡張し№3柱穴を確認。SA33掘立柱塚と昭和40年度に調査された中門西側の中樞部区画南辺塚SA10の調査報告と柱間間隔が異なる結果となる。
8月18日	中樞部区画施設南辺地区発掘開始。重機による表土除去。	2月10日	SB224(塔跡2)掘り込み地業の平面規模を確認するために、新たにSB224の東・西・南・北辺、北西隅に計6ヶ所のトレンチ(a~fトレンチ)を設定する。SB224cトレンチ(東辺)を掘削。
8月23日	SB224(塔跡2)塔跡南東部確認。	2月17日	中樞部区画施設南辺地区CトレンチにおいてSX249築地塼を掘削しSA33掘立柱塚№11・12柱穴を確認。
8月25日	中樞部区画施設南辺地区において発掘体験教室開催。参加者8名。	2月23日	SB224fトレンチ(西辺)を掘削。
10月1日	中樞部区画施設南辺地区において中央旧トレンチを掘り上げる。トレンチ断面で、昭和33年度調査で報告された土壌遺構とされた掘り込み地業(本調査により築地塼の基底部と判明= SX249築地塼跡)を確認。SX249築地塼跡の南に確認面より深さ約2mのSD194大溝、さらに南側にSD197小溝を確認。小溝の中には礎石が落ち込んでいた。	3月1日	SB224hトレンチ(北辺)を掘削。
11月25日	七重塔西方地区の遺構確認終了。南北約17m以上、東西最大約18mの範囲でSB224(塔跡2)版築上の広がりを確認。北側は調査区外に延びる。SB224(塔跡2)の礎石や明確な礎石の据え付け痕跡および基礎外装などは未検出。唯一心礎部に径約3mの掘り込みを検出。	3月7日	SB224dトレンチ(東辺)を掘削。
12月20日	中樞部区画施設南辺地区の遺構確認終了。調査区北側でSX249築地塼跡のローム土を主体とする版築土が南北幅約3mで東西方向に帯状に確認された。SA33掘立柱塚柱穴はSX249築地塼版築土の下層にあたり平面確認はできず。SD194大溝の3時期(a→b→c期)の変遷を確認。	3月10日	SB224eトレンチ(南辺)を掘削。
12月22日	中樞部区画施設南辺地区・七重塔西方地区において空中写真撮影。	3月15日	SB224aトレンチ(北西隅)を掘削。
1月14日	塔跡2の記録撮影を行う。	3月16日	中樞部区画施設南辺地区BトレンチにおいてSX249築地塼版築土を掘削し、SA33掘立柱塚№10柱穴を検出。
1月15日	塔地区(塔跡1・2)周辺の地下レーダー探査を実施。	3月17日	SB224心礎部分の土坑状の落ち込みをトレンチ掘り。根固め石やその痕跡は未検出。
2月1日	SB224塔跡を切るSX269一本柱跡の断ち割りを行う。平面規模南北1.3m、東西1.2m、	3月18日	SB224各トレンチの掘削を完了し、一辺約11.2mの正方形の掘り込み地業であることが判明する。
		3月30日	調査研究指導委員会視察。
		3月31日	七重塔西方地区において空中写真撮影。中樞部区画施設南辺地区・七重塔西方地区の本年度の調査を終えた。なお、両地区ともに次年度に調査を継続予定である。



## IV 調査の概要

平成15年度予備調査は武蔵国分寺跡第570次調査として、南大門地区（南大門南方第1・2）、塔地区（七重塔南方・西方第1・2）、伽藍中樞地区（中門東方）の3地区6地点（№1～6地点）において総面積177.4㎡を実施した。調査成果として、七重塔西方第2（№5地点）において新たに地業遺構（SB224）、中門東方（№6地点）では中樞地区画施設南辺塀跡・溝跡が昭和33年度調査旧トレンチ断面により確認され、区画塀は掘立柱塀跡の上層に築地塀もしくは土塁状遺構（SX249版築状遺構）が確認された。

平成16年度調査は、第570次調査№5・6地点と同地点において調査範囲を広げて武蔵国分寺跡第578次調査として伽藍中樞地区（中樞地区画施設南辺地区）、塔地区（七重塔西方地区）の2地区2地点（№1・2地点）、総面積1055.4㎡を実施した。主な調査成果として七重塔西方地区（第578次調査№2地点）においてSB224地業遺構が塔跡であることが判明し、中樞地区画施設南辺地区（第578次調査№1地点）においてSX249版築状遺構が築地塀基底部の掘り込み地業であり、掘立柱塀から築地塀へと造り替えられたことなどが明らかとなった。なお、平成16年度の2地区は、平成17年度に継続して調査を行う予定である。

以下、平成15年度（第570次調査）・16年度（第578次調査）の2ヶ年分の調査をまとめて、南大門地区・塔地区・伽藍中樞地区の3地区に分けて、概要を報告する。

### 1 南大門地区

(1) 第570次調査№1地点：南大門南方第1（第5図、図版1-1）

地表面下約0.55mの茶褐色土（Ⅲc層）上面で遺構検出作業を行ったところ、調査区西側全体が暗褐色土の落ち込み（中近世か）で覆われ、古代の遺構は確認されなかった。遺物は、表土中より男・女瓦片、須恵器片などが少量出土。

(2) 第570次調査№2地点：南大門南方第2（第5図、図版1-2）

地表面下約0.4mの暗茶褐色土（Ⅲb層）上面で遺構検出作業を行った。検出遺構は、SD199溝跡、硬質面、小穴1個が検出された。調査は遺構確認にとどめ、断ち割りには行っていない。遺物は、表土中より男・女瓦片、須恵器・土師質土器片などが少量出土。

#### SD199溝跡

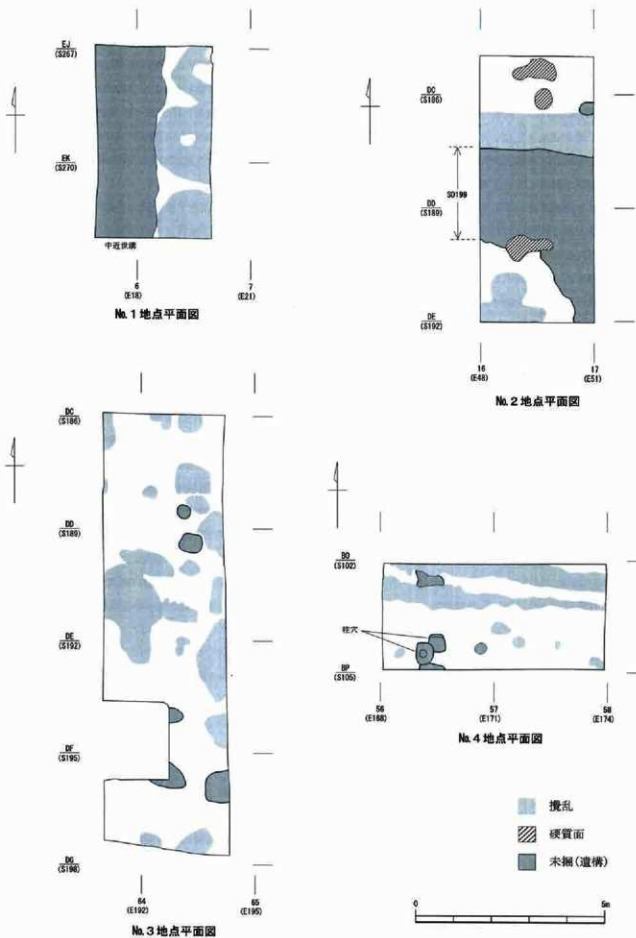
当該調査区の東側における既往調査（第242・286次）で検出されたSD199溝跡の延長線上に位置し、同一遺構と判断される。上面幅は約2.6m。調査区南東では南に広がり、別の遺構もしくは溝関連の遺構と重複している可能性がある。僧寺伽藍中軸線方向へさらに延びていることが判明した。

### 2 塔地区

(1) 第570次調査№3地点：七重塔南方（第5図、図版1-3）

地表面下約0.25～0.3mの暗茶褐色土（Ⅲb層）で遺構検出作業を行った。当時の地表面は削平を受け、残りは良くない。検出遺構は小穴5個。調査は遺構確認にとどめ、断ち割りには行っていない。遺物は、表土中より男瓦片、須恵器・土師質土器片などが少量出土。

当該地の調査において調査前に期待された地業遺構に関わる遺構は確認されなかった。南北10m以上の調査区で、建物跡などが検出されなかったことは、この地域の状況を示唆している可能性がある。



第5図 第570次調査No1~4地点 遺構配置図

(2) 第570次調査№4地点：七重塔西方第1（第5図、図版1-4）

地表面下約0.35mで、II層に似たIII層混じりのやや乱れた土層になるが、この面では遺構を検出することはできなかった。従い、地表面下0.5mの暗茶褐色土（III層）上面で遺構検出作業を行った。検出遺構は柱穴跡2基、小穴3個。調査は遺構確認のみで断ち割りには行っていない。2基の柱穴跡は重複しており、古い方は抜き穴、新しい方は柱痕跡が確認された。平面規模はともに1辺約0.4m。調査区内では組み合わせる柱穴は未検出で、全体規模は不明。遺物は、表土中より男・女瓦片、土師器・須恵器・土師質土器片などが出土。

(3) 第570次調査№5地点：七重塔西方第2（第6図、図版1-5）

第578次調査№2地点：七重塔西方地区（第8図、図版3-1）

平成15年度予備調査（第570次調査№5地点）と平成16年度調査（第578次調査№2地点）によって、現に心礎などが残る塔跡（SB223）の西方約55m地点で新たに塔跡（SB224）が確認された。説明の都合上、SB223塔跡を「塔跡1」、今回新たに確認された西方のSB224塔跡を「塔跡2」と記して区分する。

平成15年度に、地業遺構などの把握を目的に地下レーダー探査を実施したところ、塔跡1西方の墓地の南側で、約11m方形で塔基壇に似た反応範囲を捉えたので、確認のため、反応範囲の各辺に直交するトレンチ（№5地点-1・2・4・5）と中央部のトレンチ（№5地点-3）とを設置し状況の把握に努めた。その結果、地業遺構が確認され、平成16年度に地業遺構の全面調査を開始した。平成15・16年度調査成果を合わせて報告する。

地表面下約0.2～0.6mで遺構確認を行った。中央部は表土層が薄く深さ約0.2～0.3mで塔跡2の地業土が検出された。周辺部は約0.4～0.6mと厚く、暗茶褐色土（III層）で遺構確認作業を行った。検出遺構は、SB224塔跡（塔跡2）、SX269一本柱跡、SX268不明落ち込み、柱穴跡1基、土坑14基、小穴15個が検出された。

SB224塔跡（塔跡2）（第6～8図、図版3・4-1～7）

第570次調査において各トレンチで地業遺構が検出され、東・西・南辺において範囲を確認し、北辺は調査区外に延びることが判明した。また、№5地点-1トレンチにおいて塔跡2の断ち割りをを行い、掘り込み地業の底面まで確認した。第578次調査において地業遺構の全面調査を開始し、掘り込み地業の規模・形状をもとに建物や基壇規模を推定するため、第570次調査における南辺1ヶ所に加え、東辺2ヶ所（c・dトレンチ）、西辺1ヶ所（fトレンチ）、北辺1ヶ所（bトレンチ）、南辺1ヶ所（eトレンチ）、北西隅（aトレンチ）の計7ヶ所で掘り込み地業の断ち割りをを行った。なお、第570次トレンチでは掘り込み地業底面まで掘削したが、その他のトレンチの掘削は、掘り込み部が明確に確認できる深さとした。

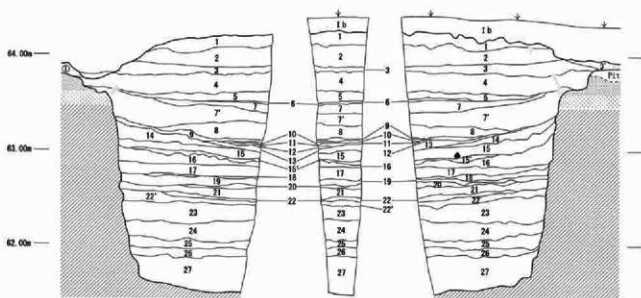
塔跡2は、礎石が一つも遺存せず、明確な根固め石などの礎石据え付け痕跡も未検出で、上面は削平されている。唯一、基壇中央に心礎の据え付け・抜き取りと関連が注目される略円形の落ち込みが確認されたのみである（この検証は来年度調査に譲る）。また、基壇外装や雨落ち溝、塔跡1のような石敷きやその痕跡も検出されず、基壇の形状・規模は不明である。塔跡2の基礎地業は、東西最大約18m、南北約17m以上の規模で確認され、北側は調査区外の墓地内に延びる。周囲は耕作や近現代の敷道の溝などにより削平を受けて、不整形に残存する。

掘り込み地業は、中心部はほぼ垂直に掘り込まれ、その外側は各場所で遺存状態が異なり不明確だが、浅くならずに掘り込まれる。垂直の掘り込み部は、一辺約11.2mのほぼ正方形の平面形をなす。aトレンチでは掘り込み部の北西隅が検出され、掘り込み角度は約60～70°で垂直ではないが、正方形を意識して隅を掘り込んでいる。掘り込み地業の傾きは僧寺伽藍中軸線より約6°東偏する。この規模は、地下レーダーによる遺構探査で反応のあった地業遺構の範囲とほぼ重なる。

第570次調査において掘り込み部の南辺中央の断ち割りをを行い、掘り込み部の底面を確認した。垂直の掘り込み部層のIII層（暗茶褐色土）上部を基準にすると、底面まで深さ2.3m。底面は遺構中央部へ向かって僅かに下り傾斜。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、中半に工具痕跡が残る。

中央部の版築は、基準面より上にも約0.4m積み上がるので、厚みは合わせて2.7mを測る。全体で28枚以上の





SB224

- |    |       |           |   |
|----|-------|-----------|---|
| 1  | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。すきまあり。ローム土からなる。黒色土粒混入。                                  |
| 2  | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 極めて硬質。ローム土からなる。黒色土粒混入。  |
| 3  | 黒色土   | 10YR1.7/1 | 硬くしまる。ローム粒、ロームブロック少量。   |
| 4  | 褐色土   | 10YR5/6   | 硬くしまる。ローム土からなる。一部、ローム土と黒色土の混雑層。                               |
| 5  | 黄褐色土  | 10YR6/6   | と黒色土 10YR1.7/1 の互層。黄褐色土はロームを主体とし黒色土粒少量混入。棕色土はローム粒、ロームブロックが混入。 |
| 6  | 黒色土   | 10YR1.7/1 | 硬くしまる。ローム粒少量。   |
| 7  | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 硬質だがしりややなし。すきまあり。ローム粒、ロームブロック多量。黒色土粒、黒色ブロック少量。暗茶褐色土微量。        |
| 8  | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 硬くしまる。すきまあり。ローム粒、ロームブロック多量。黒色土粒、黒色ブロック少量。暗茶褐色土微量。             |
| 9  | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。すきまややあり。黒色土粒微量。   |
| 10 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 極めて硬質。ローム主体。  |
| 11 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 硬くしまる。すきまややあり。ロームブロックと黒色土混合。暗茶褐色土微量。                          |
| 12 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 極めて硬質。ローム土からなる。   |
| 13 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | ローム、黒色、暗茶褐色土ブロックの混合。  |
| 14 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 硬くしまる。ローム粒、ロームブロック多量。黒色土ブロック、黒色土粒少量。暗茶褐色土微量。                  |
| 15 | 黒褐色土  | 10YR3/1   | しりやあり。  |
| 16 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 硬くしまる。すきまあり。ロームブロック主体。黒色土粒、黒色ブロック、暗茶褐色土ブロック少量。                |
| 17 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 15層と同じ。ややすきまあり。   |
| 18 | 黒褐色土  | 10YR3/1   | しりやあるがすきまあり。  |
| 19 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。すきまあり。ローム土からなり黒色土微量。                                    |
| 20 | 黒褐色土  | 10YR3/1   | しりやあり。ローム粒、ロームブロック少量。   |
| 21 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。すきまあり。ローム土からなる。黒色土ブロック多く混入。                             |
| 22 | 黒褐色土  | 10YR3/1   | 硬くしまる。ロームブロック多く含む。  |
| 23 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬質。すきまあり。黒色土粒少量。ロームブロック多量。                                    |
| 24 | 黒褐色土  | 10YR3/1   | 硬くしまる。ローム粒、ロームブロック多く含む。                                       |
| 25 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。黒色土、赤褐色土ブロック混入。   |
| 26 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。ややすきまあり。黒色土ブロック微量。                                      |
| 27 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。黒色土ブロック微量。  |
| 28 | 黄褐色土  | 10YR6/6   | 硬くしまる。すきまあり。ローム土主体。   |
| 29 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 硬くしまる。ローム土主体。   |
| 30 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | 硬くしまる。すきまあり。ロームブロック多い。  |
| 31 | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | やや硬質。ローム粒多量。ロームブロック少量。3層と一連の積み上がり。                            |

第7図 第570次調査No.5地点 SB224(塔跡2)掘り込み地業断面図



版築層が確認されるが、大きく3つに区分できる。下位は厚み1.3mで、ロームブロックを主とした版築層が11層以上あり、上部で良く叩き平坦に整えている。全体に良く締まる（硬度計で23～28）。中位は厚み0.7mで、全体的に隙間が目立ち、版築層が11層以上ある。良く締まるが、上層より弱い（硬度計で25～30）。上位は厚み0.7mで、黒色土とローム土の互層が顕著で、版築層が6層以上ある。隙間無く硬く締まる（硬度計で24～31）。なお、北側墓地側における版築土遺存部の最高標高は64.56m、掘り込み部底面の標高は61.49mであり、厚みは最大3.07mを測り、かつ、上部は削られ、下部は掘り込み中央へ向って深くなるので、若干加算されることとなる。

版築土は、掘り込み部と地上部とに連続したものとして確認され、上位上層版築土（ローム土層・黒色土層）は、掘り込み部全体を覆い、西側の広がり方から掘り込み外の地上部にも及んでいたものと思われる。地上部の版築土は掘り込み部の中心を基点として、最も残存する調査区北西隅からその範囲を推定すると一辺最大20.4mを測る。これは塔跡1の基壇（一辺17.7m）周囲の雨落水敷溝を含めた範囲にほぼ相当する。

東・西・北側の掘り込み部では、地上部にのびる版築土の下層に整地土層（黒褐色土層）が確認され、この整地土を掘り込んで塔跡2の地盤が施されている。

塔やその基壇を建造した痕跡となる版築堰板痕跡や堰板添柱の痕跡、建築足場穴などは未確認。また、火災を受けたような基壇が被熱した痕跡は見られず、表土中にも焼土はほとんど確認されない。

出土遺物は版築土内より、第570次調査では須恵器坏もしくは壳体部1点、男瓦1点、女瓦3点、種別不明瓦2点、礫4点、第578次調査では男瓦8点、女瓦11点、種別不明瓦1点、須恵器1点、土師器1点が出土し、いずれも小片である。

#### 塔跡2に関連する遺構について

塔跡2と切り合い関係にある遺構について、以下に報告する。

##### SX269一本柱跡（第8・9図、図版4-8）

SX269一本柱跡は、掘方の規模は東西約1.2m、南北約1.3mの方形で、深さ約2m、柱痕跡から柱径約0.4～0.5m（確認面）、根入れ約1.4mを測る。位置及び、掘方の向きが塔跡2と一致することから、意識して立てた可能性がある。塔跡2西辺の版築土を壊して掘り込まれる。

##### SX268不明落ち込み（第8図）

SX268不明落ち込みは最大深さ3.8m以上を測り、黒褐色土・暗茶褐色土・黄褐色土が互層に堆積し、比較的締まる。南北幅は約1.7m以内、東西は8.8m以上で調査区の東端で立ち上がる。塔跡2の東辺にほぼ直行して、塔跡2を切って掘り込まれる。

##### SK3254・3255・3256・3258・3259・3260・3266土坑（第8図）

SK3254土坑は、版築土を一層剥いで確認された。版築作業工程中の所産と考えられるが、性格は不明である。長径0.94m、短径0.77mの不整形な楕円形で深さ0.4m。

SK3255・3256・3258・3259・3266土坑の覆土はローム土を主とし、硬く締まる。これらは調査区の他所ではみられず、かつ掘り込み部の周縁に集中しており、何らかの関連性が指摘できる。塔跡2の遺構確認、精査の段階でプランが確認された。SK3255土坑は長径1.0m、短径0.9mの楕円形で深さ0.6m、SK3256土坑は長径0.66m、短径0.64mのやや不整形の隅丸方形で深さ0.46m、SK3258土坑は長径1.4m、短径0.95mの隅丸長方形で深さ0.65m、SK3266土坑はSK3255土坑に切られる土坑で、南北0.54m、東西0.52m以上の隅丸方形で深さ0.5m。

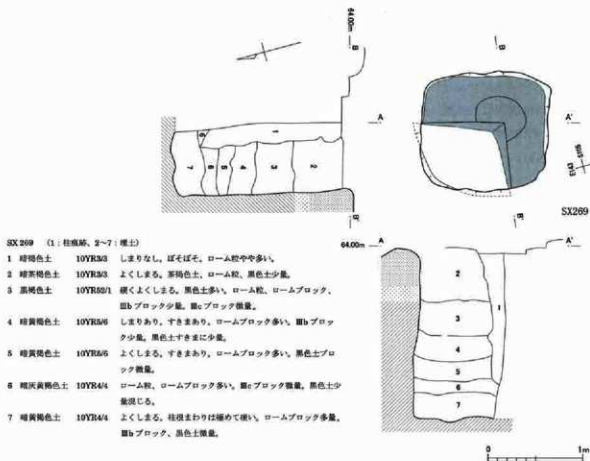
SK3260土坑は長径1.1m、短径0.6mの楕円形。覆土は黒褐色土を主体で、他の基壇上の土坑と異なる。

##### その他の遺構（第8図）

塔跡2の周辺の遺構として、東側にはほぼ同一平面規模のSK3263・3264・3281土坑とSX270柱穴跡、南西にSK3265土坑、西側にSK3261・3262土坑などが検出された。断ち割りを行ったものについて以下に概要を述べる。

SK3263土坑は南北2.7m、東西2.3m以上の隅丸方形で、深さ1.8m。覆土の堆積状況から人為的な埋め戻しと

みられる。SK3281土坑は南北1.8m以上、東西2.2m以上の隅丸方形で、深さは1.5m。SX268不明落ち込みにより切れ、覆土の堆積状況から人為的な埋め戻しとみられる。SK3265土坑は南北3.2m以上、東西6.8m以上、深さ0.6m。以上の土坑から瓦が出土するが、瓦溜めのような出土状況ではない。SX270柱穴跡は長径1m、短径0.8mの隅丸方形で深さ0.7m。柱径0.26mの柱痕跡があり、建て替えない。SK3281土坑を切って掘り込まれる。



SX269 (1:柱痕跡、2~7:埋土)

- 1 暗褐色土 10YR3/3 しまりなし、ぼそぼそ、ローム粒や多い。
- 2 暗茶褐色土 10YR3/3 よくしまる。茶褐色土、ローム粒、黒色土少量。
- 3 黒褐色土 10YR3/1 硬くよくしまる。黒色土多い、ローム粒、ロームブロック、黒bブロック少量、黒cブロック微量。
- 4 暗黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、すまあまり、ロームブロック多い、黒bブロック少量、黒色土すまに少量。
- 5 暗黄褐色土 10YR5/6 よくしまる、すまあまり、ロームブロック多い、黒色土ブロック微量。
- 6 暗灰黄褐色土 10YR4/4 ローム粒、ロームブロック多い、黒cブロック微量、黒色土少量混じる。
- 7 暗黄褐色土 10YR4/4 よくしまる。柱根まわりは極めて硬い、ロームブロック多量、黒bブロック、黒色土微量。

第9図 SX269一本柱跡平面・断面図

### 3 伽藍中樞地区

(1) 第570次調査№6地点：中門東方（第10図、図版1-6）

第578次調査№1地点：中樞部区画施設南辺地区（第12図、図版2-1）

伽藍中樞地区は、中門跡東側において、中樞部区画施設である獨立柱脚跡や大小2条の溝跡を検出することを目的とし、平成15年度（第570次調査№6地点）に予備調査、平成16年度（第578次調査№1地点）より調査範囲において本格的な調査を開始した。当該地区は、日本考古学協会・仏教遺跡調査特別委員会による昭和33年度調査において土壇状の遺構や数条の溝跡が検出されているが、当調査において昭和33年度調査の南北トレンチ2本（中央旧トレンチ・東側旧トレンチ）、東西トレンチ1本（西側旧トレンチ）を確認し、再調査を行った。

地表面下（砂などの盛土0.1~0.2mを除く）約0.4mにあるⅡ~Ⅲa層で遺構覆土の上面も現れるので、そこで、確認作業を行った。当時の地表土と考えられるⅡ層の残りが良いため、遺構の遺存状態が良いのが当該地区の特長である。なお、遺構確認は主に調査区北側の区画部分について行い、南側、特に南西についての精査は控え、遺構の観察は旧トレンチ断面により行い、新たな断ち割りは最小限にとどめた。



僧寺伽藍中樞部を区画する施設のSA33掘立柱塼跡・SX249築地塼跡、塼跡の外側に並行するSD194大溝、SD197小溝が検出された。その他に塼の内側に並行するSD396溝跡や、SA32柱穴列、SK3275土坑、小穴15個を検出した。

#### 調査経過

第570次調査は、SA33掘立柱塼跡№12柱穴、SD194・197・396溝跡、SX249地業遺構（第578次調査において築地塼跡と判明）を検出し、東側旧トレンチにおいて断面観察を行った。断ち割りには、SA33掘立柱塼跡№11柱穴上東半にSX249地業遺構からSD396溝跡にかけて行った。第578次調査は、中央・西側旧トレンチにおける遺構の断面観察に加え、A～Dトレンチを設定し、SX249築地塼跡の下層遺構であるSA33掘立柱塼跡の確認、Aトレンチ北側ではSD194溝跡、Aトレンチ南側においてはSD194溝跡の南側の立ち上がりとSD197溝跡との確認を行った。なお、Aトレンチ南側におけるSD194・197溝跡の検出は次年度に持ち越しとなった。

#### SA33掘立柱塼跡（第10～12図・図版2-2～4）

SA33掘立柱塼跡は、中門から派生し、金堂・講堂・僧坊などを区画する伽藍中樞部区画南辺界で、中門の東側にあたる。第570・578次調査により、中門東表柱より数えて、2、3、10～13本目の柱穴（SA33№2・3・10～13柱穴）を検出した。

中樞部区画南辺界は、市教育委員会第6次調査、国分寺市遺跡調査会武蔵国分寺跡第226・360次調査により、中門西側の掘立柱塼跡（SA10）が検出され、中門の西表柱より西へ12尺（3.56m）+15尺（4.56m）+8尺（2.38m、以西等間隔）に柱が確認されている。当初、東側も西側と対称に柱穴が検出されると想定したが、西側にみれば1本目と2本目の柱穴の間にもう1本柱穴が確認された。このため、調査区西端で検出された柱穴をSA33-№2柱穴として、№3柱穴以東の柱間が8尺等間と想定すると調査区東側で検出された4基の柱穴は№10～13柱穴となる。柱間は、№2柱穴と№3柱穴の間がやや狭いが、№3柱穴以東は8尺等間となる。中門取り付き部分および№1柱穴は、次年度調査する予定であり、この結果をみて各柱間の数値について再検討する。

検出状況は、SA33掘立柱塼跡の上層にSX249築地塼跡の基底部をなす掘り込み地業の版築土が覆っており、この版築土の下層で柱穴を検出した。検出した柱穴は、№2柱穴が東側半分、№3・13柱穴が西側半分、№10柱穴が北側半分で、№11・12柱穴はベルトを残し全体を確認した。なお、№12柱穴は、昭和33年度のトレンチ調査の断ち割りにより、東半部の掘方は下端のみ残存する。

方向は、柱抜き取り穴平面での計測に限るが、僧寺伽藍中軸線に対して厳密には直交せず、調査区の西端と東端で0.2mほどの差が生じている。また、位置も中門西側検出位置より0.8mほど南にある。僧寺伽藍中軸線を想定した調査の極地座標軸の設定の誤りである可能性もあり、今後の調査で確定していく必要がある。

柱穴の平面規模は、№11柱穴が東西1.44m、南北1.35mを測り、掘方の形状は方形。№2柱穴は南北0.77m、№3柱穴は南北1.24m、№10柱穴は東西約1.27m、№12柱穴は南北1.33m、№13柱穴は南北1.22mである。№2柱穴のみやや小振りの柱掘方である。深さは、№12柱穴で遺構確認面から1.0m。

建て替えは無く、いずれも、柱の抜き取り痕跡を確認した。これは、中門跡西側の状況と同じである。ただし、中門跡西側のSA10掘立柱塼跡では1間おきに掘方が溝状に連結している状況がみられたが、当該地区においては、今のところ、確認されない。なお、当調査においては、遺構の断ち割りは行わず、東側旧トレンチの断面において№12柱穴の観察を行ったのみである。

#### SX249築地塼跡（第10～12・15図、図版2-4・5）

SX249築地塼跡は、SA33掘立柱塼跡の上層遺構で伽藍中樞部を区画する塼跡である。検出されたのは掘り込み地業部で築地基底部と考えられ、昭和33年度調査で確認された土壇状遺構と同一と想定される。中樞部区画施設の当該地区以外では築地塼として観察された遺構はなく、区画東側では抜き取りの後に道路状の硬化面が検出されており、状況が異なっている。

SX249築地塼跡はSA33掘立柱塼跡の上層に沿って東西方向に帯状に検出された。中央および東側旧トレンチの

断面観察により、SX249築地崩跡はSA33掘立柱崩跡より新しく、掘立柱崩の柱を抜いた後に、地面を浅く掘り下げ、整地をした上に、土を積んでいる状況がわかり、築地崩への造り替えを契機とする一連の工程がみとれる。最下部の積み土には、微量の白色粘土粒が入る。

基底部の掘り込み地層は、基底部幅3.1m、残存高0.44mを測り、北側は舟形に掘り込まれて南側の立ち上がりはSD194溝跡（c期）により壊されている。築地下端の裾幅は側溝などから、2.4m以内と想定される。

基底部の積み土は、場所により異なる様相を呈す。中央旧トレンチ西壁断面（SA33№10柱穴上西半～推定№9柱穴間上）では8層（第15図）。東側旧トレンチ断面（SA33№10柱穴上東半部～№13柱穴間上）では3層（第11図）。SA33№3柱穴上は、版築層が7層で、掘り込み底面から黒褐色土（Ⅱ・Ⅲb層土主体）・茶褐色土（Ⅲc層土主体）・暗黄褐色土（ローム土主体）・茶褐色土（Ⅲc層土主体）・暗茶褐色土（Ⅲb層土主体）・茶褐色土（Ⅲc層土主体）・暗黄褐色土（ローム土主体）である。これらの違いは、平面においてみるとSA33№3柱穴付近から中央旧トレンチ間では確認することはできなかったが、SA33№10柱穴上において、積み土の変わり目が確認できた。築地崩造りの作業工区を示すものと思われるが、これによると東から中門に向かって掘り込み地層がなされたことがわかり、西側が比較的しっかりとした版築が施される傾向にある。

伴う側溝は、北側がSD396溝跡、南側はSD194溝跡b期が該当すると考えられる。ただし、SD396溝跡は、SA33掘立柱崩跡推定№5柱穴付近で途切れ、なおかつ北に振れる。SD194溝跡b期堆積土上層からc期にかけて、築地崩壊土と考えられる白色粘土を含む大量のローム土とともに、多量の瓦が出土し、瓦葺きの可能性が高い。

#### SD194溝跡（第10～13図、図版2-6・8）

SD194溝跡（大溝）は、SA33掘立柱崩跡・SX249築地崩跡の南側の東西溝で、区画壁の外側に沿って中樞部をめぐる溝である。昭和33年度中央旧トレンチを掘りあげ、3時期の変遷（a→b→c期）と規模を確認した。

a期は、規模が上面現存幅約2.7m、底面幅約1.9m、深さ遺構確認面より約2m、SA33掘立柱崩跡と並行する時期と考えられる。SA33掘立柱崩跡の崩心より溝心まで、約4.6mを測る。埋土は自然堆積と考えられる。上部層より微量の白色粘土粒が含まれる。底面は0.1mほどローム土を貼って底面を形成する。この特徴は寺院地及び伽藍地区西溝と共通する。底面幅方は、格子状に区切られ、東西1.9m以上が1単位と確認される。掘削の工程や分相を表わしているものと考えられる。遺物は断面観察により少量含まれている。

b期は、規模が上面現存幅約4.7m、底面幅約2.5m、深さは遺構確認面より約1.4m。SX249築地崩跡と並行する時期と考えられる。a期の北側の立ち上がり部分を掘り、底面はロームブロック主体土により形成する。埋土は自然堆積と考えられる。白色粘土粒が全体に少量混入する。瓦片が少量出土する。

c期は、規模が上面現存幅約5.9m、底面幅約1.5m、深さは遺構確認面より約1.0m、ローム土を多量に含み、SX249築地崩跡の崩壊段階と考えられる。

#### SD197溝跡（第10～12・14図、図版2-7）

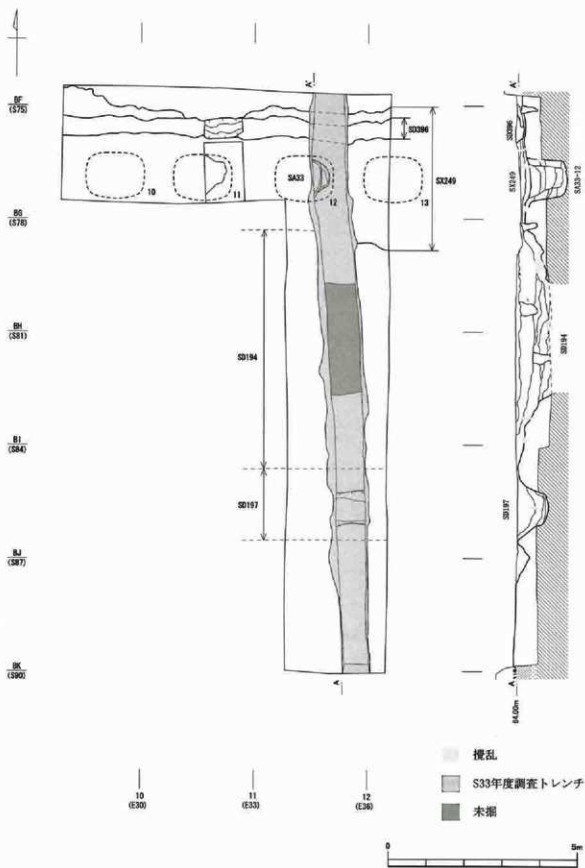
SD197溝跡（小溝）は、SD194溝跡の南側の東西溝で、区画壁の外側に沿って中樞部をめぐる。溝心まで、崩心より8.8mを測る。中央旧トレンチでは、上面幅1.9m、底面幅0.8m、確認面からの深さ1.0mを測る。底面はロームブロック主体土により形成する。埋土は自然堆積と考えられ、上層には白色粘土粒が顕著に含まれる。遺物は瓦を少量出土する。

#### SD396溝跡（第10～12・15図、図版2-5）

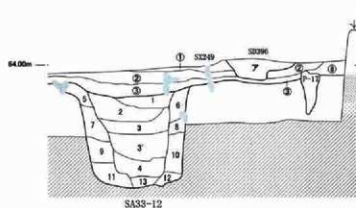
SD396溝跡は、SX249築地崩跡の北側に沿う小溝で、SA33掘立柱崩跡の推定№7柱穴付近で北に振れ、推定№5柱穴付近で途切れる。幅約0.4～0.9m、深さ約0.2m。SD194溝跡c期と同様に築地崩壊土が堆積する。

#### SA32柱列跡（第12図）

SA33掘立柱崩跡にほぼ並行し、3間分の柱穴が並ぶ。柱間が広いので、柱列跡とする。柱間は西から3.2m+3.3m+3.3m。幅方は径0.5～0.7m、深さ0.2～0.25m。柱痕跡は径0.2mを測る。



第10図 第570次調査No. 6地点 中門東方 遺構配置図

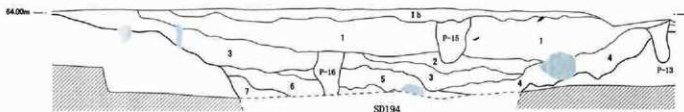


SA33-12

- ① 暗黄褐色土 10YR3/3 しまりあり、ローム粒少量。  
 ② 暗茶褐色土 10YR3/3 暗茶褐色土主体、ローム粒微量。  
 ③ 黒褐色土 10YR2/1 硬くしまる。暗褐色土混じる。  
 SD386  
 ⑦ 暗黄褐色土 10YR5/6 ローム粒多量、黒色土粒少量、白色粘土粒やや多く混入。  
 普通土  
 ⑧ 黒色土 10YR1.5/1 しまりあり。粒子粗い、ローム粒少量、白色粘土粒微量。暗茶褐色土シ状にある。

SA33-12 (1~4: 柱状取戻、6~13: 埋土)

- 1 黒褐色土 10YR2/1 しまりややあまい、ローム粒多い、ロームブロックやや多い。  
 2 黒褐色土 10YR2/1 しまりややあまい、ローム粒やや少ない、ロームブロック少量、暗茶褐色ブロック混じる。白色粘土粒少量。  
 3 暗茶褐色土 10YR3/2 しまりややあまい、ローム粒多量、ロームブロック多い、暗茶褐色ブロック少量。  
 3' 暗茶褐色土 10YR3/2 しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック多い、暗茶褐色ブロック少量。  
 4 黒褐色土 10YR2/1 しまりあり、ローム粒やや多い、ロームブロック少量、暗茶褐色ブロック少量。  
 5 黒褐色土 10YR2/1 しまりあり、ローム粒やや多い、白色粘土粒微量。  
 6 黒褐色土 10YR2/1 しまりあり、ローム粒やや多い、ロームブロック微量、白色粘土粒微量。  
 7 黒褐色土 10YR2/1 しまりややあまい、ローム粒多い、ロームブロック少量、暗茶褐色ブロック混じる。  
 8 暗黄褐色土 10YR3/4 しまりあり、ローム粒多量、ロームブロックやや多い、暗茶褐色ブロック微量。  
 9 灰黄褐色土 10YR3/1 しまりあり、粘性あり、ローム粒、ロームブロック、黒色土少量、暗茶褐色ブロック多く含む。  
 10 黒褐色土 10YR2/2 しまりあまい、ローム粒多い、ロームブロック多い、暗茶褐色ブロック少量、黒色土少量。  
 11 暗黄褐色土 10YR3/8 しまりややあまい、ロームブロック主体で暗茶褐色土混じる。  
 12 黒褐色土 10YR2/2 しまりややあまい、ロームブロック多い。  
 13 暗黄褐色土 10YR3/6 しまりあり、ローム粒多い、ロームブロックやや多い、暗茶褐色ブロック少量、黒色土微量。



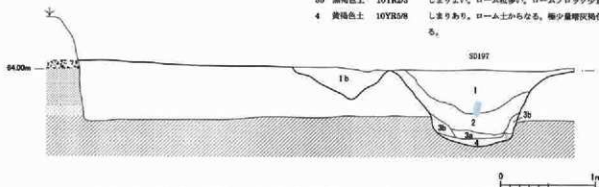
SD194

(a 期: 7 b 期: 5, 6 c 期: 1~4)

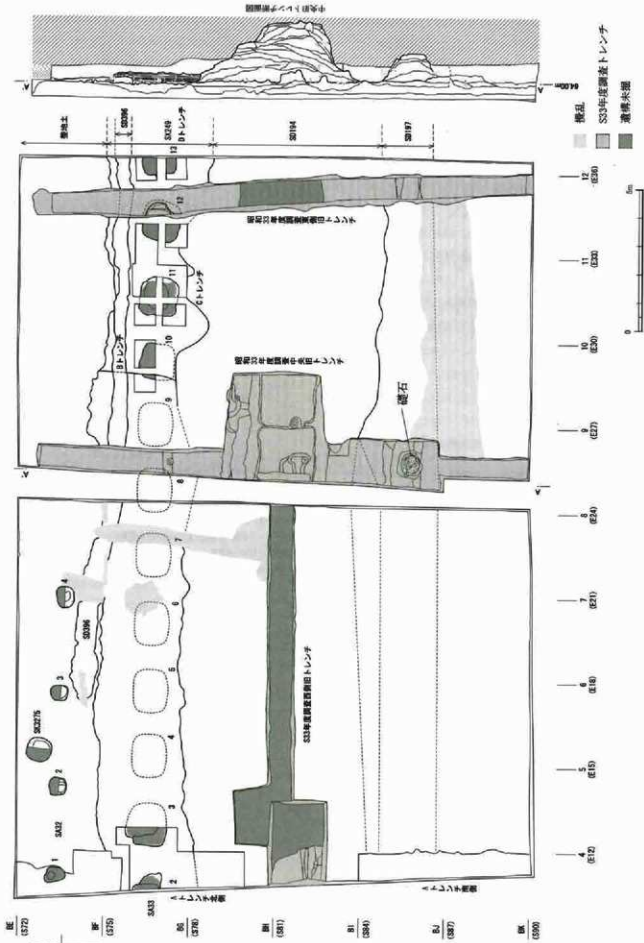
- 1 暗黄褐色土 10YR5/6 しまりあまい、粘性弱い、ローム粒、ロームブロック多量、白色粘土粒、黒色土粒少量、炭化物混入。  
 2 暗黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、白色粘土粒微量、黒色土粒混入。  
 3 暗褐色土 10YR3/3 しまりややあり、粘性なし、ローム粒多い、白色粘土粒微量、黒色土粒微量、赤土、炭化物混入。  
 4 暗褐色土 10YR3/3 しまりややあり、粘性弱い、ローム粒多量、赤土混入。  
 5 暗黄褐色土 10YR7/8 ロームのかたまり、黒色土少量混じる。  
 6 黒褐色土 10YR2/1 粘性弱い、ローム粒微量、赤土混入、白色粘土粒微量。  
 7 暗茶褐色土 10YR3/2 粘性ややあり、ローム粒少量、赤土混入。

SD197

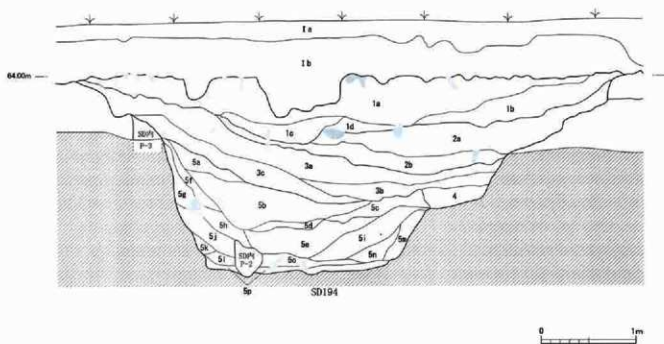
- 1 黒褐色土 10YR2/3 しまりあり、粒子粗い、ローム粒多い、白色粘土粒多い、暗茶褐色土がしみ状に混入。  
 2 黒褐色土 10YR2/2 しまりあり、ローム粒少量、暗茶褐色土がしみ状に混入。  
 3a 黒褐色土 10YR2/3 しまりあり、ローム粒多い。  
 3b 黒褐色土 10YR2/3 しまりよい、ローム粒多い、ロームブロック少量。  
 4 黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、ローム土からなる、極少量暗茶褐色土混じる。



第11図 第570次調査No.6地点 昭和33年度旧トレンチ 南北断面図



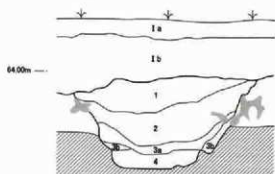
第12図 第578次調査No. 1地点 中核部区域施設南辺地区 遺構配置図



SD194 (a期:5 b期:3, 4 c期:1, 2)

- |    |       |           |  |
|----|-------|-----------|--|
| 1a | 暗黄褐色土 | 10YR4/6   | しまりあり, すきまあり, ローム粒多量, ロームブロック多い, 黒色土少量, 白色粘土粒少量, |
| 1b | 暗黄褐色土 | 10YR6/8   | しまりあり, すきまあり, ローム粒、ロームブロック多量, 白色粘土粒少量,           |
| 1c | 黒褐色土  | 10YR3/1   | しまりあり, ローム粒やや多い,                                 |
| 1d | 暗黄褐色土 | 10YR6/8   | しまりあり, すきまあり, ローム粒やや多い, ロームブロック多量, 白色粘土粒少量,      |
| 2a | 暗黄褐色土 | 10YR3/1   | よくしまる, ローム粒多い, ロームブロック少量, 炭化物微量,                 |
| 2b | 暗茶褐色土 | 10YR3/1   | しまりあり, すきま大, ローム粒、ロームブロック多量, 黒色土少量, 白色粘土粒微量,     |
| 2c | 黒褐色土  | 10YR2/1   | しまりあり, ローム粒、ロームブロック少量, 白色粘土粒微量,                  |
| 3a | 暗茶褐色土 | 10YR2/1   | しまりあり, ローム粒、ロームブロック、白色粘土粒含む,                     |
| 3b | 黒褐色土  | 10YR3/2   | しまりあり, 粘性あり, ローム粒、ロームブロック、白色粘土粒少量,               |
| 4  | 暗黄褐色土 | 10YR4/6   | すきまあり, ロームブロック主体, ローム粒多量, くすんだ球褐色土混入,            |
| 5a | 黒褐色土  | 10YR2/3   | しまりあり, ローム粒少量, ロームブロック微量, 白色粘土粒少量,               |
| 5b | 黒褐色土  | 10YR2/2   | しまりあり, ローム粒少量, 白色粘土粒微量,                          |
| 5c | 暗茶褐色土 | 7.5YR4/4  | しまりあり, ローム粒多い, ロームブロック微量, 黒色土多い,                 |
| 5d | 黒褐色土  | 10YR2/3   | しまりあり, ローム粒多い, ロームブロック微量,                        |
| 5e | 黒褐色土  | 10YR2/1   | しまりあり, ローム粒少量, ロームブロック微量, 炭化物あり, 白色粘土粒微量,        |
| 5f | 黒褐色土  | 7.5YR2/3  | しまりやや甘い, ローム粒少量, ローム土、暗茶褐色土少く表にあり,               |
| 5g | 暗黄褐色土 | 7.5YR5/8  | しまりやや甘い, ローム土主体, 黒褐色土少量混じる,                      |
| 5h | 黒褐色土  | 10YR2/3   | しまりやや甘い, ローム粒多い, ロームブロック少量,                      |
| 5i | 暗茶褐色土 | 7.5YR4/4  | しまりあり, すきまあり, ローム粒多い, ロームブロック微量,                 |
| 5j | 暗茶褐色土 | 10YR1/3/1 | しまりやや甘い, ローム粒少量, ロームブロック多い, 互層ブロック混入,            |
| 5k | 暗黄褐色土 | 10YR5/6   | しまり甘い, ローム土主体, 黒褐色土混じる,                          |
| 5l | 黒褐色土  | 10YR3/2   | しまりあり, ローム粒多い, ロームブロック少量,                        |
| 5m | 暗褐色土  | 10YR3/3   | しまり甘い, すきまあり, ローム粒多量,                            |
| 5n | 黒褐色土  | 10YR2/2   | しまりやや甘い, ローム土と黒褐色土の互層,                           |
| 5o | 黒褐色土  | 10YR3/2   | 硬くよくしまる, 粘性あり, ローム粒少量, ロームブロック微量,                |
| 5p | 黄褐色土  | 10YR3/2   | 極めて硬い, ローム土からなる,                                 |

第13図 第578次調査No. 1地点 昭和33年度中央旧トレンチ SD194溝跡南北断面図



- |    |       |         |   |
|----|-------|---------|---|
| 1  | 黒褐色土  | 10YR3/6 | しまりあり、粒子粗い、ローム粒多い、ロームブロック微量、白色粘土粒多い、黒色土粒やや多い、 |
| 2  | 黒褐色土  | 10YR2/2 | しまりあり、ローム粒少量、白色粘土粒微量、暗茶褐色粘質土含む、               |
| 3a | 黒褐色土  | 10YR2/3 | しまりあり、ローム粒やや多い、ロームブロック微量、黒色土粒少量、              |
| 3b | 黒褐色土  | 10YR2/3 | しまりややあまい、ローム粒多い、ロームブロック少量、                    |
| 4  | 暗黄褐色土 | 10YR5/8 | しまりあり、ローム粒、ロームブロック多量、黒褐色土混じる、                 |



第14図 第578次調査No. 1地点 昭和33年度中央旧トレンチ SD197溝跡南北断面図

SD064

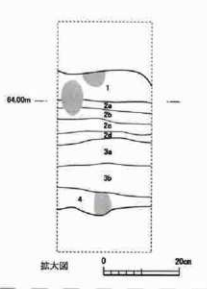
- ① 暗黄褐色土 10YR5/8 ローム粒多量、黒色土粒少量、白色粘土粒やや多く混入、

整地土

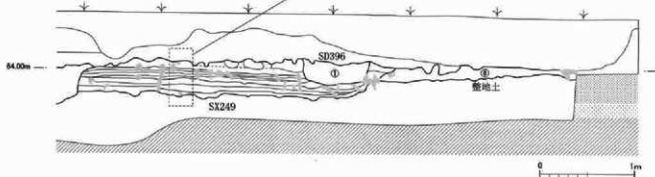
- ② 黒色土 10YK1.7/1 しまりあり、粒子粗い、ローム粒少量、白色粘土粒微量、暗茶褐色土シミ状にある、

SX249

- 1 暗黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、ローム土主体、白色粘土粒微量、  
 2a 黒褐色土 10YR2/1 粒子の粗いローム粒少量混入、白色粘土粒微量、  
 2b 暗黄褐色土 10YR6/9 ローム粒、ロームブロック多い、  
 2c 黒褐色土 10YR2/1 ローム粒少量、粒子の粗いローム粒少量、  
 2d 暗黄褐色土 10YR5/8 ロームブロック、ローム粒多い、白色粘土粒微量、  
 3a 暗茶褐色土 10YR3/3 硬くしまる、ローム粒少量、ロームブロック微量、  
 3b 暗茶褐色土 10YR3/3 硬くしまる、ローム粒少量、ロームブロック微量、  
 茶褐色土混入、  
 4 黒褐色土 10YR3/3 硬くしまる、ローム粒多い、ロームブロック微量、  
 白色粘土粒微量、



拡大図 0 20cm



第15図 第578次調査No. 1地点 昭和33年度中央旧トレンチ SX249築地堀跡南北断面図

## V 地下レーダーによる遺構探査の成果

### 探査の目的と測線の設定

平成15年度に、今後の事前遺構確認調査を各地区において進める上の基礎資料とするために、物理探査（地下レーダー探査）によって遺構分布の概略状況を把握することを目的とした。このため、買収済み地内全域を対象に、20mメッシュで測線を設定した。さらに、反応のあった範囲については、適宜、補助測線を加えた。この結果、測線長計5,592mとなった。なお、測線の方向は、想定僧寺伽藍中軸線に合わせて設定している調査基準線に合わせた。その結果として、七重塔西方において、約11m四方の範囲に塔跡に類する反射面が確認され、これを受けて着手した平成15年度の前遺構確認調査によりSB224（塔跡2）が検出された。新たに塔跡が検出された状況のもとに、平成16年度には、塔跡1及び塔跡2の周辺部（主に北方地区）における遺構の分布・形状を推定し、平成17年度における周辺部確認調査計画の立案に資することを目的とし、平成15年度実施の20mメッシュ測線内に5mメッシュの測線を設定した。測線長計2,139m。以下の主な探査結果は応用地質株式会社『史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）事前遺構確認調査に伴う地下レーダー探査 報告書』により、図面は一部変更して掲載した。

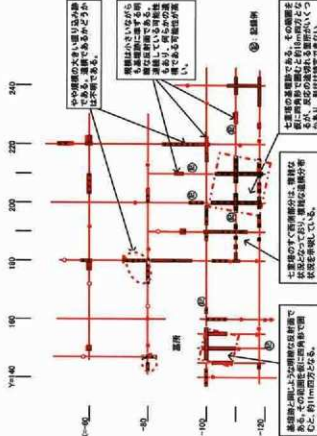
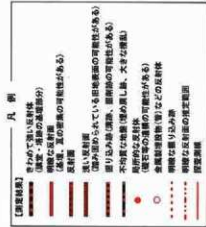
### 平成15年度の主な探査の結果（第16図）

- i 金堂と講堂に挟まれた範囲には、大きな掘り込み跡や、小規模ながらも明瞭な反射面が存在しており、遺構の存在を示唆している。
- ii 七重塔西側において約11m四方の範囲に明瞭な反射面が存在し、基壇建物の掘り込み地業遺構に類する反応を示しており、何らかの遺構である可能性が高い。
- iii 七重塔の北側及び東側には、小規模ながらも明瞭な反射面が存在しており、遺構の存在を示唆している。
- iv このほか、各所に掘り込み跡や、反射体が多数存在し、それぞれ遺構の可能性のある注意箇所として指摘される。

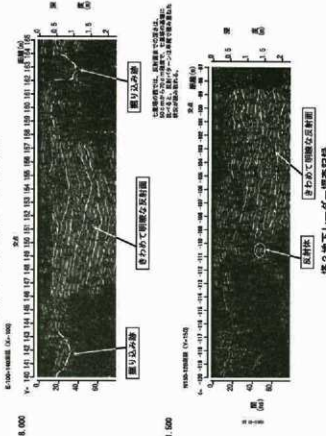
### 平成16年度の主な探査の結果（第17図）

- i 塔跡2の北方には、遺構として特定できる反応はない。
- ii 塔跡1と塔跡2の中央北方には遺構として特定できる反応はない。
- iii 塔跡1の中心線上の北方には何らかの遺構の可能性のある反応があった。
- iv 塔跡1の周囲においては、基壇跡と推定される領域のほか、地業跡が外側3m範囲に広がっていること、さらにその周囲に溝（瓦溜めか）がめぐっているものが推定された（昭和39年の発掘成果と矛盾しない）。





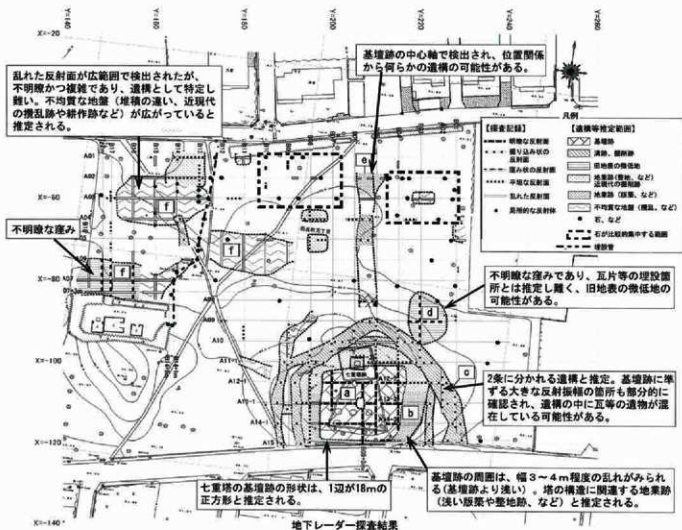
塔跡1・2周辺地下レーダー調査結果



第16図 平成15年度地下レーダーによる遺構調査



測線配置図



第17図 平成16年度地下レーダーによる遺構探査

## VI まとめ

平成15年度調査は、平成16年度以降行われる本格的な調査の計画設計のために実施し、武蔵国分寺跡第570次調査として南大門地区・伽藍中樞地区・塔地区の3地区6地点の予備調査に加えて、僧寺地区の史跡指定地のうち買収済み内全域におよぶ地下レーダーによる遺構探査を行った。その結果、塔地区（七重塔西方）において七重塔跡（塔跡1）西方約55m地点で、新たな地業遺構（塔跡2）の存在が明らかとなった。また、伽藍中樞地区（中門東方）において、中門より派生し、金堂・講堂・鐘樓・経藏・東西僧坊など主要建物を区画する中樞部区画施設南辺の中門東側にあたる部分を調査し、区画跡（SA33・SX249）とその外側を並行してめぐる大小2条の溝（SD194・197）などを確認した。廓跡について、掘立柱脚跡（SA33）とは別に築地廓跡か土塁状の遺構かと思われる地業遺構（SX249）が検出され、新たな知見が得られた。

予備調査を受けて、平成16年度調査は、武蔵国分寺跡第578次調査として、中樞部区画施設南辺地区と七重塔西方地区との2地区2地点において調査を行った。中樞部区画施設南辺地区において区画南辺跡・溝跡の規模、性格、変遷などを明らかにする目的で、予備調査の範囲を拡張して調査を行い、平成15年度に検出された地業遺構が築地廓跡の基底部であると認識され、廓跡が掘立柱脚から築地廓へと建て替えがなされたことが判明した。中樞部区画施設の他地点における既往調査では築地廓跡は未検出であり、掘立柱脚とは異なる構造の廓跡がはじめて確認されたこととなった。七重塔西方地区において、新たに検出された地業遺構の規模・性格などを明らかにする目的で、北側（築地）を除いて地業遺構の全面調査を行い、新たに発見された地業遺構を塔跡と判断するに至った。

以下、平成15・16年度の調査成果を総括してまとめたい。ただし、平成16年度調査の2地区については、調査は未了であり平成17年度以降に継続することとなり、途中経過という形で報告となる。

### 塔跡2（SB224塔跡）について

塔跡2が発見された塔跡1の西方約55m地点の七重塔西方地区は、北に隣接する墓地区内南端の土塁状の高まりに国分寺の建物の礎石と想定される礎石群が東西方向に並んで所在している。かつてその性格をめぐって議論があり、建築遺構の存在が指摘された地点であった。以下、塔跡2が検出される経緯について触れておく。

まず、明治36年の重田定一の礎石分布調査（重田1903『武蔵国分寺の廓跡』『古蹟』2-2）が初見で、墓地の周囲に6個の礎石（内4個は埋没にて未計測）を見出し、鐘樓などにあたるかとし、ついで、大正12年3月発行の『東京府史蹟勝地調査報告書 第一冊 武蔵国分寺址の調査』では、確認された2個の礎石について同廓跡などを想定した。また、太田静六博士もここに一堂宇を想定している（『武蔵国分寺復原考』『考古学雑誌』28-5・7・10）。

その後、この地点の礎石群をもって創建塔とする意見もあった。これは、七重塔が創建から70年ほど後の西暦835（承和2）年に神火（雷火）で焼失し、845（承和12）年に、男衆部の前の大領（長官）の壬生吉志福正が塔の再建を願い出て、許可されたことが『続日本後紀』に記録されており、現に礎石が残る東側の塔跡1を再建塔とする立場であった。

一方、「塔跡1」付近で戦後行われた開墾の際に得られた知見から、表土層出土瓦が再建期、下層の粘土層出土瓦が創建期として区別されることが認識されていた。

かかる問題については、昭和39年度に行われた塔跡1の発掘調査によって、基壇外周の補修（焼けた瓦が湿った粘土による）や心礎以外の礎石の据え替え（礎石を持ち上げ下部に瓦を詰め込む）の痕跡などが確認され、同じ位置での建て替えとの結論が出された。

以上の調査、研究の一方で、この地点の礎石群の性格については依然として不明のままであり、また、礎石群

の南が周囲より地影れ状に盛り上がっていることから、近年に至るまで何らかの建築遺構があると注目されていたが、発掘調査によってその存在が確認されずにいた。

そして、平成15年度に行った地下レーダーによる遺構探査の結果として塔基壇に類する正方形の地業遺構の存在が指摘され、同年（第570次調査）により地業遺構が検出され、平成16年度（第578次調査）により塔の基壇遺構と判断するに至った。

SB224は礎石および礎石の据え付け痕跡、基壇外装などは未検出で、これらの点から建物規模、性格を明らかにすることはできないが、以下の事由により、塔の基壇遺構と判断した。

i. 掘り込み部と地上部に連続した版築土が確認される遺構であり、地上部の版築土の範囲は推定で一辺最大20.4mを測り、塔跡1の基壇（一辺17.7m）周囲の雨落石敷溝を含めた範囲にほぼ相当する。

ii. 掘り込み部の平面形状は昨年年度実施分の南辺部を含め、計7ヶ所の断ち割り結果、一辺約11.2mのほぼ方形であることが確認された。塔跡1の初重平面一辺9.8mが収まる。従い、ほぼ同規模の建築平面を推定できる。

なお、版築土の状態は、ほぼ均質で、丁寧な版築が全体に及んでいることが確認された。

iii. 掘り込みの深さは、2.3m以上を測り、塔跡1の掘り込みの深さ1.7mを超える。地上部を含めた版築土の厚みは断ち割り部における計測で2.7m以上となる。

なお、北側基壇側における版築土遺存部の最高標高は64.56m、掘り込み部断ち割りにおける最低標高（最も深い北で）61.49mであり、厚みは最大3.07mを測ることとなり、かつ、上部は削られ、下部は掘り込み中央へ向って深くなるので、若干加算されることとなる。

iv. 礎石、基壇化粧材は確認されないが、掘り込み部の中心位置よりやや西にずれるも、径約3m、深さ0.2mほどで平面略円形の落ち込みがある。地積土と形状より心礎抜き取り穴または据え付け穴の可能性があり、検討中である。レベルについては、落ち込み周囲の版築土残存標高は64.3m前後であり、基壇上面もしくは地表面の標高を確定する材料はないが、残存する版築土の状況から基壇上面から大きくは削平されていないと判断される。よって、塔跡2の基壇上面のレベルが塔跡1に近いものとする。塔跡1の残存心礎天端標高64.9mから推測する下端標高が64.3mであるから、塔跡2の心礎部の落ち込みが心礎の抜き取り、または、据え付け穴の痕跡の可能性がある。規模についても、塔跡1の心礎は2.12m×1.36m、厚み0.45m以上であり、矛盾はない。心礎以外の礎石と根石については、塔跡1の残存四柱礎（南西隅）の天端標高65.3mから推測する下端標高が64.7m、同残存側柱礎（南西隅）の天端標高65.2mから推測する下端標高が64.6mであり、塔跡2では確認できないレベルとなる。

時期及び塔跡1との関係について、塔跡2について判明しているその他の事実は以下のとおりであるが、目下のところ、築造及び廃絶時期を特定することはできず、塔跡1との関係を明らかにすることは出来ない。

i. 塔跡2は掘り込みをもって建物（基壇）の方向とすると、塔跡1と同じく僧寺伽藍中軸線よりも東偏する。塔跡1の主軸方向は、測量データが不十分で、確定しておらず塔跡2と厳密には比較できないが、塔跡1と塔跡2との主軸方向は、現状においては、同様の傾きを示す。心々距離は55.3m。

ii. 版築土中より、第570次調査において須恵器坏もしくは塊体部1点、男瓦1点、女瓦3点、種別不明瓦2点のほか、礫4点、第578次調査において男瓦8点、女瓦11点、種別不明瓦1点、須恵器1点、土師器1点が出土した。瓦は新しい要素はなく、前建期に位置付けられる可能性が高いが、土師器は新しい要素がみられ、再建期まで下がる可能性がある。

iii. 地業遺構に先行する遺構はなく、この点から求めることはできない。

iv. 地業遺構と重複する後出の遺構はSX268不明落ち込み、SX269一本柱跡、SK3254～3260・3266土坑であり、SX268不明落ち込み・SX269一本柱跡より瓦片が出土しているが、未精査。

v. 残存版築土が被熱を受けた痕跡は確認されない。つまり、塔跡2が創建塔として築造され、火災を受けた状況は現状では認められない。

明治時代以降、何らかの建築遺構の存在が想定されながらも性格不明とされた礎石群とその南側の地盤一帯の場所について、第570次調査により地盤遺構が発見された。続く、第578次調査において塔跡2と判断するに至り、規模・構造などが明らかとなった。ただし、調査区北側の礎石群が塔跡2に据えられたか否かは判断としないままである。

塔跡2の発見は、承和12年(845)を上限とする塔再建が創建塔と同一位置(塔跡1)でなされたとする従来の定説と抵触するところとなり、かつ、それを前提とする国分寺の伽藍配置及びその変遷に関する従来の見解に重大な変更を迫るものである。しかしながら、塔跡2の建設(廃絶)年代の特定と塔跡1(創建・再建)との関係解明が今後の課題として残った。また、現時点では、確実に建造された根拠に欠けるので、建ち上がらなかった可能性もあり、多角的に検討を進める必要がある。平成17年度において周辺部の調査を進め、瓦溜めなどの関連遺構の確認を行い、課題の解決をめざしたい。

#### 中樞部区画施設について

成果としては、第1に堀立柱脚跡から築地脚跡への造り替えが明らかになったこと、第2に築地脚の規模について、築地下端の堀幅が2.4m以内と想定されること、第3に堀に伴う直近の大溝が3時期あり、堀の造り替えと崩壊に対応しているものと考えられるに至ったことなどである。

堀立柱脚跡は既往調査により、南側は中門西側のSA10堀立柱脚跡№1～28柱穴(市教育委員会第6次調査、遺跡調査会第226・360次調査)、東辺はSA2堀立柱脚跡(19・117次調査)、北辺(北西隅)のSA12堀立柱脚跡№1～4柱穴(322次調査)が確認され、中樞部区画堀の規模は東西約156m、南北約131mと想定される。柱間は、中門西側の南辺区画堀の調査により、中門西妻柱より西へ12尺+15尺+8尺(以西8尺等間)で、東・北面においては8尺であり、中門との取り付け部の2間分の柱間が広がる。今回、中門東側の南辺区画堀(SA33堀立柱脚跡)において中門東妻柱から数えて2・3・10～13本目の柱穴を確認し、柱間は、№2柱穴と№3柱穴の間がやや狭いがそれ以东は8尺等間となる。中門西側のSA10堀立柱脚跡と比較すると中門を挟んで東西の取り付け部分の柱間は対称ではなく、中門との取り付け部をみるとSA33堀立柱脚跡はSA10堀立柱脚跡より柱が多いことになる。この点については、次年度中門地区の調査をする予定であり、中門と堀との取り付け状況を確認した上で検討したい。

SX249築地脚跡は、SA33堀立柱脚跡の塀心に沿って上層に造られ、ほぼSA33堀立柱脚跡の位置を踏襲する。基底部幅3.1m、残存高0.44mを測り、北側は舟形に掘り込まれて南側はSD194溝跡c期、北側はSD396溝跡に切られる。築地下端の堀幅は側溝などから、2.4m以内と想定される。昭和33年度調査において回廊跡の土壌と想定された遺構と同一遺構と考えられるが、今回、築地脚の基底部の掘り込み地盤であることが判明した。築地脚跡は既往調査では未検出ではあるが、中樞部区画溝の調査地ではSD194溝跡c期と同様に築地脚の本体の崩壊土と思われる土が堆積しており、おそらく中樞部を圍繞していたと考えられる。

SD194大溝は、3時期の変遷が確認された(a→b→c期)。堀との並行関係は、SA33堀立柱脚跡とSD194溝跡a期、SX249築地脚跡とSD194溝跡b期が並行すると考えられ、築地脚崩壊段階がSD194溝跡c期に当たる。また、堀の北側のSD396溝跡は覆土からSD194溝跡c期に並行する。

今後の課題としては、第1に築地脚への造り替えが全面に及んでいるか否かの確認(中門への取り付け状況)、第2に出土遺物の整理・分析を経て、各期の年代を明らかにすること(各期の原因・背景)、第3に堀と小溝との関係(小溝の性格)を明らかにすることなどがあげられる。なお、時期の特定の上で、堆積土に混入する白色粘土粒が鍵となる。現時点では、伴出する遺物から国分寺Ⅱ期(再建期)に比定しているところであるが、さらに精査を進める必要がある。





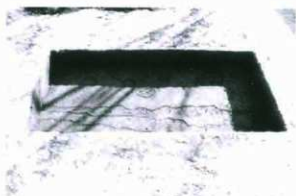
1 No.1地点 南大門南方第1 調査区全景 (南から)



2 No. 2地点 南大門南方第2 調査区全景 (東から)



3 No. 3地点 七重塔南方 調査区全景 (北から)



4 No. 4地点 七重塔西方第1 調査区全景 (北から)



5 No. 5地点 七重塔西方第2 調査区全景 (西から)



6 No. 6地点 中門東方 調査区全景 (北から)



1 中枢部区画施設南辺地区 調査区全景 遺構確認状況  
(北から)



2 SA33掘立柱塚跡No.2・3柱穴 検出状況(南から)



3 SA33掘立柱塚跡No.10~13柱穴 検出状況(西から)



4 東側旧トレンチSA33掘立柱塚跡No.12柱穴・SX249  
築地塚跡 南北土層断面(東から)



5 中央旧トレンチSX249築地塚跡・SD396溝跡  
南北土層断面(東から)



6 中央旧トレンチ SD194溝跡 南北土層断面(東から)



7 中央旧トレンチSD197溝跡 南北土層断面(東から)



8 AトレンチSD194溝跡 遺物出土状況(東から)





1 第578次調査 七重塔西方地区 調査区遠景 (南から) 右: 塔跡1 左: 塔跡2



2 第570次調査 SB224 (塔跡2)  
掘り込み地層断ち割り部  
版築土上層 (南から)



3 第570次調査 SB224 (塔跡2)  
掘り込み地層断ち割り部  
版築土中層 (南から)



4 第570次調査 SB224 (塔跡2)  
掘り込み地層断ち割り部  
版築土下層 (南から)



1 SB224(塔跡2) 調査区北側検出状況 (南東から)



2 SB224(塔跡2) aトレンチ 掘り込み地家断ち割り部 (北西から)



3 SB224(塔跡2) bトレンチ 掘り込み地家断ち割り部 (北東から)



4 SB224(塔跡2) cトレンチ 掘り込み地家断ち割り部 (南から)



5 SB224(塔跡2) dトレンチ 掘り込み地家断ち割り部 (南東から)



6 SB224(塔跡2) eトレンチ 掘り込み地家断ち割り部 (南から)



7 SB224(塔跡2) fトレンチ 掘り込み地家断ち割り部 (南から)



8 SX269一本柱跡 東西土層断面 (北から)

## 報告書抄録

ふりがな	むさしこくぶんじあとはつくつちようぎがいほう 32							
書名	武蔵国分寺跡発掘調査概報 32							
編書名	史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)保存整備事業に伴う事前遺構確認調査 平成15・16年度							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	国分寺市遺跡調査団(団長 板造秀一) 中道 誠 上敷領久 福田健夫							
編集機関	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会							
所在地	〒185-8501 東京都国分寺市戸倉1丁目6-1 国分寺市教育委員会内 TEL042-325-0111							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
武蔵国分寺跡	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35°	139°	平成15年 12月11日 ～ 平成16年 3月19日	平成15年  177.4㎡	僧寺地区保存整備事業に伴う事前遺構確認調査
				41° 09"	28° 12"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
武蔵国分寺跡	寺院跡 集落跡	奈良・ 平安時代	歴史時代 塔跡 柱穴列 圓立柱脚 築地塼 溝 土坑 柱穴 小穴	土師器・須恵器 土師質土器・灰輪陶器 瓦・埴・碓石 鉄製品・骨		七重塔西方地区において塔跡を検出		

武蔵国分寺跡発掘調査概報32

史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）保存整備事業に伴う事前遺構確認調査  
平成15・16年度

---

発行日	平成18年3月31日
編著者	国分寺市遺跡調査団 ©(団長 坂詰 秀一)
発行所	国分寺市遺跡調査会 東京都国分寺市教育委員会 〒185-8501 国分寺市戸倉1-6-1 TEL 042-325-0111(代表)
印刷所	コロニー東村山印刷所

---

令和4年(2022)3月9日 デジタル版作成